385
265

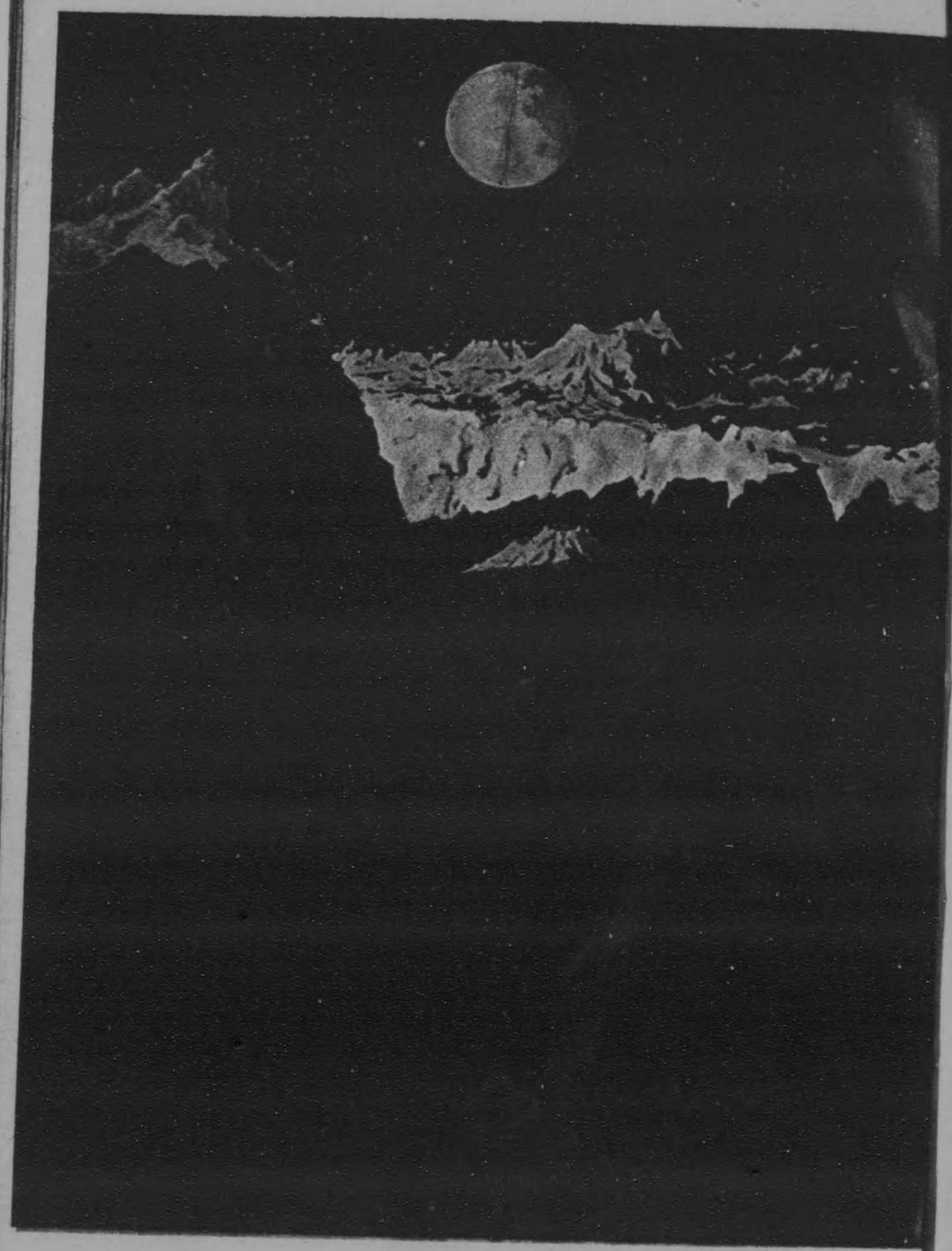
385-265

月夜に憧れて

古川龍城著

大正
12. 6. 2
内交

この圖は月世界に於ける夜間であつて、その空に月の如く光るのは地球である。地球の直徑は月のそれの四倍あるから、地球上で見た月より、四倍大きい地球が、荒寥たる月の表面上の夜を皎々と照らしてゐる。



この圖は月世界に於ける實景である。その強に月の缺く光るのは地球である。地球の直徑は月のそれの四倍あるから、地球上で見た月より、四倍大きい地球が、蒼白たる月の表面上の夜を照やす勝さしである。

はしがき

すべて人間は、すぐ手近かな所より、やゝ足もとをはなれて、手のとゞかないやうな、行けさうもないやうな境地をあこがれ、したつて、そして一生、その目的をとげずに死んでしまふのではなからうか。はるかな山のあなたにある里とか、たかい雲の上にある國とか、死んでから迷ひ行く所とか、どうも、そんなやうな所がありさうで、又なさゝうで、もしもあつたら、ひとつ旅費を調達して行つて見たいやうな、あこがれが、自分のよわ〳〵しい胸の中から、ときゞ〳〵、白いうすげむりとなつて、空に立ちのぼつて消え行くことがある。

宗教家から聞いたでか、どうかは知らないが、一體、自分がこの世に生れ出たのは、決してこの世で榮耀榮華をしたいためでなく、たゞ前の世から、未來の世へ、とぼゞゞとさすらひ行く途すがらでゞもあるやうに思はれてならない。この世を去つてから自分

のほんとうに落ちつく國は、それがどこにあるのだと、たしかに方角をいひあてることはできないけれども、何となく、ずつと向ふの野のはてと、空のはてとが接してゐる、そのもつとあちらに沈潛してゐるうすぐらい所のやうに思はれる。

自分と同じこの世にゐる、自分を生みつけてくれた母親よりも、又自分を命にかへても大事にしてくれる戀人よりも、もつとそのあこがれの國にすむ人たちが、堪へがたいほど懷かしい。併し、そんな勝手なことばかり言つても、その國に今すぐ行けるものでもなく、又萬が一にも行きついたところで、果して豫期したほど、向ふの人々が自分を歡待してくれるか、どうか、中々おぼつかないものだ。

そこで、なるべく、自分の住所の近くに、せめて、それに似かよつた境地があれば、もつけの幸だが、果してそんなよい所があるだらうかとの疑ひが、心の奥から、しづかに起つて來る。けれども憂ふれ勿れだ。それは手近かに萬更ないこともないから……。

それは月夜だ。野原も山も、限なく、裝ひをかへて、あだかも淡い哀しみと、ほのか

な樂しみとを、織りまぜた夢の國のやうなものを現出するのは、この月夜だ。明るい太陽が花びらが、くづれ落ちるやうに、西に入つた後、くらい闇夜に、人々が寂寞と恐怖とを感じ出さうとする際、高い木の梢よりまだ高い所に、おほらかに輝き冴える月かけは、いかに人心をなぐさめ、いたはるか、それは昔人のかつて、しばゞ〳〵經驗をふんで來たところだらう。げに月の光りに照らし出された夜の景色ほど、自分と現實とを遠く引きはなして、はかない夢の國、幻の境に、吾等を運んでくれるものは又とあるまい。晝間見える山川草木の一切のデテールは、すべて闇の暗い塗料にぬりつぶされて、その上に、青い月光の繪具が、一帶にうすくはがれてゐる。

かうした景色の中に、ふら〳〵とうつゝのごとく、さまよへば、誰人といへども、魂の内部まで、きれいに洗滌されたやうに思はれ、おのづと心がほうつとして、年ごろあこがれしたつてゐる、我が理想境に到達したかの感じが、しみ〴〵と胸に湧き出すだらう。そしてこの煩はしい、面倒くさい現實の世間から、いくらか超脱して、心のどこか

に一種のはかない悅樂と、滿足とを感ずるに至るだらう。

自分は、今この現實から離脫して、さながら夢か、幻のやうな世界を示現してくれる月夜の情景を心しみ〴〵味はつて、そして、それから湧き出る興味の詫びしさ、寂しさを一般の人々に傳へたいとの望みから本書を書き綴つて見た次第である。

目次

第一章　月は東へ行く……一
三つの美觀——月の動き方——月の自轉——月の一公轉と一朔望との周期のちがふ理由——月の運動の大要
第二章　畫家のゑがいた月……一六
月の盈虛の理由——諸種の形の月の名稱——月の明暗界線——月の傾きと、その出沒の時刻——誤つた三日月——畫家への注意
第三章　月世界の巡遊……三八
月の大きさ——月の表面——月世界の水と大氣——月

世界の晝の景色――月世界の夜の景色――月が尙生きてゐるとの說
第四章　四季の月の頌……六九
夜の世界――四季の滿月の高さ――春の月――夏の月――秋の月――冬の月――新らしい月夜の觀賞
第五章　月夜を舞臺とした傳說……一〇七
かぐや姫の昇天――月に冴える琴の音――月夜の嵯峨の悲劇――その他かずかずの物語
第六章　月は地球の分身……一三二
星雲說の大要――地球と月とは昔同體であつた――月は將來地球に落ちて來る――地球の臨終――最後に生き殘つた一人――太陽の消滅――はかなき人生
第七章　餘談……一五〇
金星の盈虛――他の世界の月――天球上に於ける月の經路――月と舊曆――滌好法師の月夜觀――高山樗牛の月夜觀――吾が月夜觀

目次終り

第一章　月は東へ行く

三つの美觀

山々の頂きの白雪が日々にはげて、地平の空がほのかに霞むころともなれば、澤になながれる水もすこしは溫んで、みなそこには鮮がのどかにぬめるやうになる。そして野原には大勢のくさのはが、おしあひへしあひ臂をはる。そんなことは萬が一にもないが、もしもこの春の好季節がはるゞと、かなたの空から訪れて來ても、たゞ青い草の葉ばかり、しげり合つて、いつまで待つても、ちつとも紅い花の蕾がくづれなかつたら、やさしい乙女子たちが泣きだすだらう。それよりかもつと氣の毒なのは白い蝶々が、せつかく、お日樣にあたゝめられて、この春の野に生れおちても、花のおやどがなかつたら、ほんとにどうにもしやうがありやしない。して

みると花は實のやうに食はれはしないが、やつぱりなくてはかなはぬものらしい。

こんどは男の子が母のけんめいの丹青により、しだいに身のたけがのびて、第一に洟をたらさぬやうになり、次にみなりをつくらふ年頃となれば、男子の一生の關所ともいふべき兵隊檢査といふのを、いやおうなしに受けなければならない。ところがこの頃となれば黄兒時代の趣味が、根こそぎうしなはれて、何となく、かうまだ見ぬ世の友でもあくがれるやうな目つきにかはつて、筋肉のむくり上つた、そのすこやかな雙の腕は、なにものかを抱擁したい風がほのみえてくる。いつたい若い男は何物にあんなに魅せられてゐるのだらう。わかりきつたことだが、それはうらわかい異性のかゞやかな軀體をつゝむ衣服を透して、こぼれおちて、ひろがる肌の生々しい匂ひを想像しつゝ、ひたぶる思ひ

さく除せよ NT

わづらうて居るのである。もしもこの地上に一人のわかい女のかげだに見えなかつたら、若い男たちはさぞ、寺の本堂の丸柱や、公園の枯松の幹に抱きすがつて、やるせない思ひに狂るひあばれることだらう。して見ると内心如夜叉とか何とかと、そしられてゐる女もなかつたら、さかりのついた牡犬みたいに觸れるものにまつはりつく、いやらしい男が簇出して、世の靜穩はとてもたもてる見込みがないであらう。

もう一つだけ必要なものがある。あの日ねもす、天の青海原に、ほこらかに翼をひろげた日輪も、やがては花やかな夕映えをのこして、西方淨土にしづしづと退轉すれば、餌を啄んでゐた鳥めらも、びつくりして自分のほんの雨のもりない木賃宿みたいな塒にとびかへり、猫の眼もするどく輝がやくやうになる。すると早や氣味のわるいうばだまの闇のとばりが、すきまなく山も林も藁屋を

も包んで、さて〳〵目あきは不都合なものぢやと瞽女にわらはれねばならぬ仕儀となつて來る。それでも暗い天上には、たゞほんのお義理にガラスのかけらのやうな星があちこちに、ふるへてゐるけれども、あんな薄ぐらい、じれつたいともしびでは新聞も何も讀めやしない。そんなまつくらやみが來る夜も來る夜も、つゞいたら、人間がめいわくするばかりか、初夏になつても、ほとゝぎすだつて、はらをたてゝ默りこくつてしまふだらう。だからお月樣が、ときどき群星をはらひのけて、ぱつと白金の火山灰をまきちらしたやうな、うつくしい光明を大空から投げ下してくれないと、全くやみ夜の連續はあき〳〵して、生きがひのないことだと思ふにいたるかも知れない。

げに花と女と、そして月の三つは今更いふまでもなく天地の間のもつとも美しいもので、かつ今といたやうな理由で人生には絶對に入用である。そこで今

花と女について說くのはまたのことにして、自分がすこしばかり天文の知識をもちあはせてゐるとの薄弱な理由の下に、もつぱらたゞ月についてのみ、なにがしか書きならべるのだが、實をいへば、いま月そのものを讃美するのでなく、月の光りにてらし出された夜の情景、ならびにその感想について思ふまゝ、何のこだはりもなく、きがねもなく、いと心やすらかに述べようとするのである。

月の動き方

わかりきつたことだが、それでも話の順序として、月の動き方を一言したい。吾々の地球は逃げよう逃げようとかゝつてゐるのだが、それでも太陽の引力にひきとめられてさうもならず、やむを得ずして、その太陽のまはりをぐる〳〵廻ることになつた。その一周りが一年を費やし、又太陽と地球との間のへだたりは大凡三千八百萬里ほどある。それから地球のぐるりをこんどは月が廻つてゐるのである。つまり月は地球を

廻つてその上、太陽を廻らねばならぬから、その歩いていく道筋はうね〳〵して、蛇の匐つたあとのやうだ。このとき月は地球にたいして常に約十萬里ばかりの間隔をたもち、月がのがれようとするのを、地球がその引力でさはさせじと、ひつぱつてゐるのは、あだかも地球と太陽との關係のやうである。地球のひとまはりは一年かゝるが、月の方は二十七日と三分の一で、手輕にまはつてしまふ。

地球がちやんときめられた長い〳〵その道筋を、一年で廻りおはるには、コチ〳〵とうごく時計の一セコンドの間に、おどろいてはいけない。七里半といふ形容もできないすさまじい勢で、疾驅して居る。がしかし月はなにしろその道筋がわりあひに短かいから、あたへられた二十七日三分の一で、一廻りを完成するには一つのセコンドのあひだに、十一町あまりしか走らないが、この走

りかたがのろいと馬鹿にしてはこまる。それでも地球上のもろ〳〵の足自慢にくらべたら、とてもとても比較にもなんにもならないほど、はやいのであつて、一ばんすさまじいのは大砲のたまであるが、あれとて一秒の間に八町たらずしかとぶものではないから、月のかけあしの中々はやいことが推しはかられるであらう。お月夜にわれ〳〵は現にそのかけあしで急ぐ月を見てゐるのだが、地球と月との間があんまり離れてゐるので、別に大して走つて行くとも思へないのは仕方がない。

さてこれから、少々ばかりわかりにくい話しをせねばならぬ……といつたところで大したことでもないが……實はお月樣は東へ〳〵と進んでいくと利口ぶつたら、さぞかし皆の人々は、何をいふのだ、淨瑠璃の天の網島にだつて、よしないことに氣をふれ、最後の念をみださずとも、西へ〳〵と行く月を、如

來とおがみ目をはなたず、只西方へ忘りやるなど、あるのをおれはよくおぼえてゐるぞと頑張るだらうが、いくら淨瑠璃にあらうとも、東へいくから、いくといふのだ。そこでこゝの道理がたれにもはつきり、わかつてもらふために、ちよつとくだ〳〵しい説明にはいるが、しばらくの辛抱をねがひたい。いまもしこゝに一人の旅客があつて、列車の三等室に窮屈がり、水のきれいな京都から、埃の立ちまよふ東京へと東下りするとせよ。するとしなくてもそんな人は毎日幾百千人あるか知れやしない。そのうちに、菓子やすしを貪つて腹はくちくなり、新聞にもよみあき、さうかと言つてとなりの美人は根つから話し相手になつてくれず、しやうことなしに、窓から頸をはみださせて、をちこちの景色を觀賞するやうになる。

さうしてゐる中に、だん〳〵と自分自身がえらいいきほひで走つてゐることを、煙草の火の消えたのとともに、わすれはて、たゞもう一圖に山がうごく、雲がはしる、烏めのとまりをる電信棒がとぶとばかり、感ちがひして來るだらう。それが妙なことには、何もかもいつしよくたに、たゞ西をさしていそぎにいそぐ。そればかりか、實際は仲仙道をわらぢがけで、東する旅人のわびしい姿さへ、あらいぶかしや、西へ〳〵とあとずさりする。

このあとずさりが、吾が輩の今説明しようとする一件に最ももつてこいの好材料なのだ。いにしへから吾が地球は西から東へとぐる〳〵、目まぐるしく來る日も來る日も、獨樂のまねことがその商賣だ。さうすると、實際はほとんど動かない幾千の恒星たちや、又少しはいざつても、惑星などの手合は、ともにおほざつばに、地球の廻轉の方向と正反對に、東から西へ、東から西へと走馬燈が繁昌する。それはとりもなほさず、吾々の眼に日月星辰東に上り、西に沒

するがごとく見えるのである。ところで月は眞實、大勢の星たちの作る天景の間を、脚絆にわらぢで、甲斐々しく、たつたひとり、ひよつとこひよつとこと、とこしへに疲れぬ足ごりで、寂しい旅をつゞけて居るが、地球といふ列車の廻りかたが、なか〳〵最大急行なので、天上の仲仙道の足達者も、實のところ東へ進むのだが、それが見掛け上、西へ〳〵と行く月を、如來とおがみ……などと言はれるやうに、西へ身じろいで行くと、凡夫の眼にはうつるのである。これくらゐ説明すりや、本章の標題、月は東へ行くが、大がいわかるだらうと安堵しておく。

月の自轉　その次ぎに地球は太陽のぐるりを廻りながらも、また自分自身が廻轉すること、さながらかの車輪が地上を進行すると同時に、自身もまた軸のまはりに廻るとおなじことだが、月もやつぱり、

地球のまはりに輪をゑがきながら、自身も廻轉するが、地球が一日で一廻轉するのとはことかはり、月は地球をまはる間に、自體はたつた二度だけまはるだけだ。すなはち二十七日と三分の一で、自分のからだがぐるりと一まはりすることゝなる。であるから月はいつ見ても、そのおなじ半面を地球にむけ、他の半面は永遠の謎として、人類が見ようとしたつて絶對に見ることはできないのである。どうして月が地球を一周りすると同時に、自體もまた一周りすると、その半面しか、月の廻るみちすぢの中心に座する地球には見えないかといふにあだかもかの廻り馬場のまんなかに陣取る見物人には、馬がはじめその左側なら左側を見物人の方へ見えるやうにして、走りだすと、しまひまで見物人には馬の左側だけしか見えるものでないが、もつとはるかに離れて、馬場の外側から遠望する人には、馬の右側、尾、左側、頭から又右側と、馬體の各部分が萬

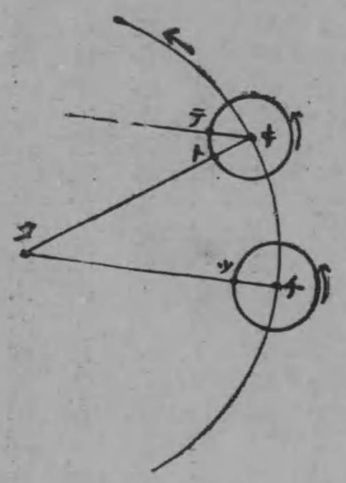
逼なく見えるであらう。それはなぜかといふに、馬が馬場を一周りするあひだに、馬のからだも亦一周りするからである。月が運動するばあひでも、もしも太陽からでも見て居たら、きつと月は地球をまはるあひだに、その表面の各部分をつぎ〳〵に太陽の方へあらはすことだらう。

つまり月が始終同じ半面を地球にさしむけて、他の半面がうしろむきになつてゐるのは、二十七日三分の一で自分のからだを一廻轉させてゐる證據である。嗚呼見られぬ月の半面、見られぬからこそ、なほさら見たいのが人情だ。吾々は今あだかも、たゞ手紙だけ往復させてゐる未だ見ぬこひびとの顔を想像するやうな心持で、いつも月の裏面にあくがれてゐる。

月の一公轉と朔望との間隔とのちがふ理由

月の運動についての説明は右のごとく、できるだけ詳はしくしたが、こゝにもう一つのこされた重要な件がある。それは

外でもないが月が、地球を一廻轉するのが二十七日三分の一であるが、滿月から滿月まで、又は新月から新月までも、やはり地球を廻轉するからおこる現象であるから、おなじく二十七日三分の一でありさうなはずであるが、事實さうでなく、月が滿月から滿月までいろ〳〵とその形をかへるには二十九日半を要する。これは一見いぶかしいことであるが、次の圖解でだいたい了解のできることゝ思ふ。



圖のまんなかの夕に太陽がすはつてゐるものとし、そのまはりを地球が若干日かゝつてチからキに丁度、矢でしめした方向にすゝむものと心得られたい。それからチのぐるりの小さい圓は

月の道で、月がツといふ太陽と地球とをむすびつけた線のうちに入ると、それが新月として地球からは全く見えなくなるが、尤もこのことについての詳說は次章にゆづる。さてそれからツに來た月が尙前へまはつていくあひだに、地球もちつとはして居ず、キに追りついたとし、そのとき月も又二十七日三分の一の時間を全くまはりおはつてテに來たのである。ところがそれでは未だ新月にはなり得ないから、つかれた足をやすめるひまもなく、尙ほトまで奮發しないと新月にはならない。それには二十七日三分の一では不足で二十九日半はかゝるのである。

つまり月の一廻轉と、新月から新月までとの時間に相違のあるのは、地球がそのみちを前に進むからで、もしも、地球がおとなしく、いつまでも元の位置を守つてゐれば、決して雙方の期日に、くひちがひのできるわけはないのであ

る。

月の運動の大要　これであまり面白くもない月の動き方をすつかり說明しおはつたつもりである。もう一度おさらへをするとかうである。

月はおよそ十萬里の距離をたもちながら地球をまはりつゝ、太陽をまはる。

月の地球をまはる時日は二十七日三分の一で、又そのあひだに月自身一廻轉する。

月は始終地球にその半面だけしか見せてくれない。

月の速さは一秒間に十一町あまりである。

月は常に天空上を西から東へと動いていく。

月の同じ形にかへる期日、たとへば新月から新月までは二十九日半を要する。

本章ではこれだけのことを述べたのであるが、さらに次章では月の盈ち缺け

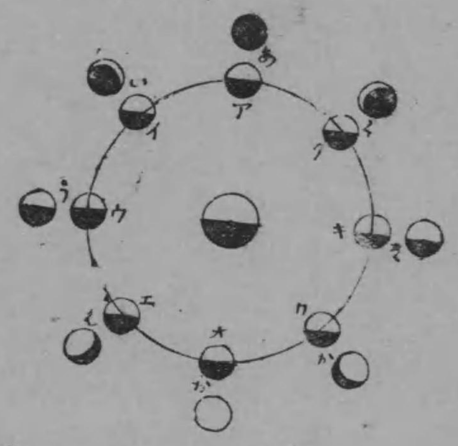
の具合、及び畫家がそれをゑがいて時々まちがひを惹き起こすことなどを說かうと思ふ。

第二章　畫家のゑがいた月

月の盈虛の理由

多くの天體は大抵いつも圓く見えるが、月を第一としその他二三の星には圓くなつたり、だん〳〵缺けていつたり、即ち盈虛の現象を呈するものがある。なぜこのやうな現象をくりかへすかといふに、それはその天體が自らひかりを發しないから起るのであつて、今大きなゴム毬を暗い室におき、ランプでてらせば、それは丁度半分だけ、ランプにむいてゐる側が明るく、その反對の側はまつくらである。そしてその明るい半面と暗い半面との境界はこの毬を一周した圓である。この境をつくる圓を

明暗界線といふむづかしい名をつけておかう。いまこのゴム毬を、ランプの方から眺めすかせば、よく輝いて輪廓がまるく見えるけれども、こんどはランプと正反對の側にまはつて、ランプと毬とを同じ方向にねらふと、毬はまつくろけで、輪廓はまるいにはまるいが、前のばあひとはちがつて、こんどは黑い輪廓だ。それで明るいばあひと、暗いばあひとがあることが、わかつたが、次にはランプを右手にして、ランプ、毬、人と直角になるやうな位置から見れば、右側半分だけが光り、左側半分だけが暗い。その反對にランプを左手にして立てば左側半分だけが光り、そのほかランプに近よつて見れば光る部分がますますふえ、遠のけばへつていく。つまらぬことを、くだ〳〵して述べるが、これがすぐ月の盈虛の現象をとくに大きに役にたつから仕方がない。



挿圖の中心は地球であつて、この本の上から日光がかゞやくと見做すから、上半分が白く、下半分が黒い。地球も月も、ともに暗黒體だからいつも半分だけしか太陽にてらされないからしたがつて半分だけ光るのだ。地球をまんなかにして月が、アイウエオカキクと、日數かなねて、する〳〵とすなほに廻つていく。そしてそれが二十九日半を要するわけであるが、いま地球からアにある月をすかし見れば、そのときは丁度あひにく月のまつくろの半面が、地球の方へむいて居るから、鍋の尻を見てゐるやうに、吾々地球人には黒い輪廓の炭團があるごとく天に見える道

理であるが、天の背景は夜はくらく、晝は大氣が日光を散亂させて邪魔するから、どちらみちくろい炭團が見える筈はない。しかしもしか都合がよいと、このとき月の黒いかげが、日輪の輝く面の上にのりかゝることがあつて、日食といふ世俗の人がめづらしがる現象がおこる。この時は確かに炭團が見えたことになる。朔とも新月ともいふのは、正にこの際で、むかしの陰暦の一日がこのときから初まる。それから三日ばかり月が進行をつゞけると、……といつてもわざかしい人間のこしらへた列車は時々故障をおこして立往生するが、自分の通るべき天上の軌道をすべる月には絶對に故障はおこらないから安心だ…。さうするとイのやうな所まで來るから、地球から見上げるとごく少しばかり光つた部分が、三日月匂ふ細眉毛といつたやうな具合に、美しい女の裂れながな眼の上に、ほのかににほふ細長い眉毛のやうな恰好のお月樣が、日輪のいまし

地平の下に落魄して、未だ大空に夕映えののこれる頃、いともうらはかなげにありとも知れぬ光を放つて、西の低いそらにほのめいてゐるのを、いつでも人々は見たであらう。イの位置の月はそれで正に、いのやうに見える。この細眉毛が次第に濃く太くなつていつて、陰暦の七八日ごろともなれば、月はウに辿りつき、日輪と直角の位置を取れば丁度その右半分だけかゞやいて見え、うのかたちとなる。上弦の月といふのはこのときで、なほずん〳〵月は進んで、エに到れば、もう暗い部分がわづかしか殘らず、えのやうにちよつと滿月に近い形狀となつて、月夜もいよ〳〵明るく、とかく寒がりの年寄りたちも、小便におきたついで、空を見てよい月だなあ。

月が尙も進行してオに着けば、全く太陽と反對の側に來たことになり、光る全面が夜もすがら、いみじく冴えかゞやいて、おの形の滿月又は望となる。わ

けても陰暦八月十五夜の滿月は俳人や閑人（つまびと）の最も嘆賞おかないところである。カにいけば、こんどは右側に暗い部分ができはじめ、かの如くなり、キに至れば半分だけの光りとなり、ウと反對の部分が見えてきの恰好とかはる。この月を下弦の月といひ、いつでも朝方の空にひかるから、唯有明の月ぞのこれるの月並調も出來上るわけである。下弦をすぎてクに來ればくの形となり、それをすぎて、又もとの新月の炭團となる。滿つれば缺くる世のならひとかいつて、月は永遠にこの盈虛の諸相を、しづのをだまきのやうに、くりかへしくりかへし、いつ果てるといふきりがないのである。考へてみれば、こんな單調なことを報酬をもうけずに、やるのはかはいさうではないか。

諸種の形の月の名稱　餘計なことながら、こゝにちよつと、いろ〳〵の日附における月の名前をかきならべておく。

三日月はむろん陰暦三日の月で、金葉集に、宵のまに仄かに人をみか月のあかで入りにし影ぞ戀しき、とあるが、なべてのことは、まだ飽かないうちに終るこそ、かへつていつまでもいつまでも、興のさめないものである。

弓張月は上弦又は下弦の月をいふ。ほゝぎす名をも雲井にあぐるかな。ゆみはり月のいるにまかせては、鵺を退治した源三位頼政の詠じたところである。

この世をば我が世とぞおもふ望月の……といふ歌にもある望月はすなはち滿月のことである。

十六日の夜の月を十六夜の月といふ。十六夜日記に、ゆくりなくあくがれ出しいざよひの月やおくれぬかたみなるべきとある。

十七夜の月は立待の月、十八夜の月を居待の月、十九夜の月を寢待又は臥待の月、二十夜の月を更待の月となか〳〵おぼえるに骨がおれる。

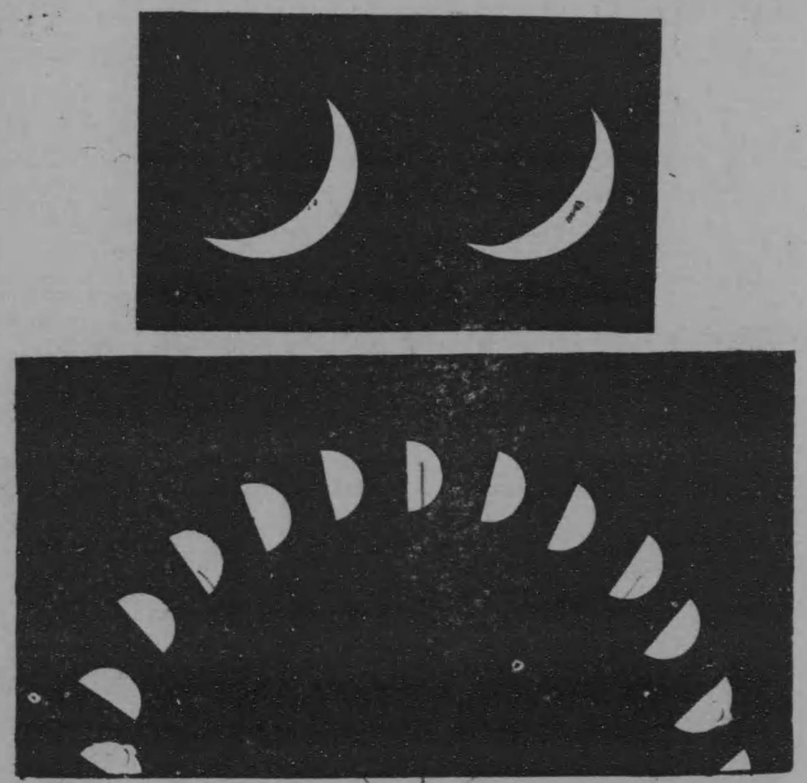
二十夜以後の月を有明月といふ。有明のつれなくみえしわかれより、あかつきばかりうきものはなし。長月のあり明の月のありつゝも、君しきまさば我戀めやも。いつも有明の月はやるせない胸の思ひを詠嘆するばあひに、ひきあひに出される。

月の明暗界

さてこれから、ちつとばかり畫かきさんたちの參考になりさうなことを三箇條ほど羅列するといひ出したら、なんだか鹿爪らしく、聞えるものゝ、何もさう改つていふやうな大袈裟なことでないから安心して讀んでもらひたい。

先づ第一に、月の明暗界線について一言する。月球は日光にてらされて、その半面だけしか光らず、半面は暗い。そしてその明暗兩部分の境界線は圓形をなしてゐるが、圓の平面に直角に見れば、やはり圓に見えるものゝ、すこしは

すかひに見ると、その圓はもはや圓形ではなく、楕圓形に見えて來るのは、吾々の日常經驗することに度々出て來る。段々とはすかひの度合が大きくなるにしたがひ、楕圓はいよ〳〵細長くなり、ついに目を圓の平面内に持つて來ると、楕圓は直線になつて終ふ。圖は三日月であるが、その明暗界線は正に楕圓でなければならない。そして左は明暗界線が圓になつてゐるから、にせ三日月で、右は正しく楕圓になつてゐるから本當の三日月である。明暗界線の圓の場合が滿月で、それから下弦までは楕圓で、光つた方がふくれ出し、下弦は吾々の目が明暗界線の圓のうちに入つたときである。下弦から新月までは楕圓ではあるが、光つた部分はへこんでゐる。新月から上弦までもこのとほりで、上弦は直線となり、上弦から滿月までは光つた部分がふくれてゐる。それに明暗界線を簡單に圓ですましておくと、ぎごちない、光つた尖端のにぶいにせもの、三日



月が出來上ること、圖の左に見るやうである。ほんとうの繪師は、こんなみつともない三日月は描かないだらう。

月の傾き　又畫
とその出　面に
沒の時刻　月を

配するにあたり、たゞ格好だけよくても、夕方であるのに、三日月があんまり高く光つたり、夜半であるのに下弦の月が、中空に冴えたりしては、どうも理屈にあはないから、審美の感をそぐことが多い。畫はたゞ心持ちをあらはすだけで、必ずしも、事實に吻合しなくてもよいといへば、それまでだが、それも大概程度のあるもので、菜の花に五瓣があつたり、梅の花に四瓣しかなかつたら、いくらにも堪へがたからう。それだから、月を舞臺に入れた畫には、時刻とか、月の形とかを少しは考慮に入れなければ、珍妙なものが出來上つて、まるで他の世界の月ぢやないかと思はしめるものが往々ある。いや頻々たる

かる。

滿月は丁度太陽と正反對の位置にゐるから、天秤の兩はしのごとく、一方が上れば、他の方は下り、一方が沈めば、他の方は浮ぶといつたやうな顯梅である。だから日輪が力なく、山のあなたにかくれるころ、滿月は東の空にいとあざやかに、大きく舞ひ上つて來る。だん〳〵と夜の舞臺の進むと共に、大空高く增長し、夜半には最も高くかゞやき、それをすぎると、ぢり〳〵と西の方を目がけて輕くすべり行き、あかつき近くなれば地上になごりを惜しみつゝ、下方の世界へと落飾する。それが夏のやうに夜が短かいと、まだ滿月がしづみきらないうちに早や、旭日が東雲の空にはびこりだし、夏の夜はまだ宵ながらあけぬるを……と、ちきに歌の材料にされてしまふ。かの朝露に裾をぬらしながら、涼しい風に頰を洗はせ、夏の曉の郊外を逍遙するおりしも、煙つたやうな山の端に入らうとして、ためらひつゝある滿月にふと氣のついた刹那、實に何ともかともあるにあられぬ、さわやかな感じが、わが胸の皮と肉とを透して、心の臟までつめたく泌みこんでいくのをおぼえることがよくある。

かくて滿月は夕方出るが、その出方が毎夜およそ、五十分ばかりづゝおくれ、十六夜は日ぐれて暫しのあひだの闇がたゞよから、十六夜や海老にるほどの宵の闇といつたやうな句があらはれる。かうして次第に月の出はおくれがちとなり、二十三日ごろの下弦の月は、あだかも人々のうまいに入れる夜半の物靜けさをやぶつて、東方の地平線から赤褐色ににぶく光り、ものすごくせり上つて來て、今の今まで眞の闇の世であつたところを、にはかに照らし初め、並木松の幹が長く黑く地面に這ふにいたる。忽ち見る大蛇道にあたつて横はる。劍をぬいて切らんとすれば老松の影と器用にうたひおさめる、この松の影は下弦以後の月がつくるいたづらであかつきに中天にへのぼり、正午頃、人のきづかぬうちにこそ〳〵と沒してしまふ。

それから止め度なくおくれて出で、新月に至れば、日輪といつしよに出沒し、

かつ暗黑面を吾人の方にさしむけるから、何も見ることは出來ない。新月をすぎて二日となれば、太陽よりおくれて出るから、したがつて又太陽よりおくれて沒する。そこで小まめな人が、よく〳〵雙の眸をこすつて夕方太陽の西に傾き、まだ入るか入らないかの瀨戸際に太陽の少し上の方を、ぢつとながめると、そこには實に淡いはかない二日月が、鍋づるみたいにかゝつてゐるのがわかるが、これはよほど注意しないと見えるものでない。

二日月、三日月とます〳〵出沒ともに時刻はおくれ、太陽をはなれて、天空上東へ〳〵と進む。九日頃の上弦にいたれば月は眞晝ごきに出て、日沒ごろ、中天にそびえる。そして夜の前半を思ふまゝ照らし、人目をよろこばせ、夜半にいとまごひして、西にかくれ行く。これから滿月までのあひだが、最も人目につきやすい時機で、寒くさへなければ、早くから室内にこれこめるより、た

まには野路にさまようて、月夜の趣味を體驗するのも、まんざらではなからう。かうして滿月となれば、又太陽の沒するとき、出ることゝなる。

月の傾きを論ずるのは、相應に厄介なことであるが、一番わかりやすい上弦の月をとつて說明し、あとは簡單にかたづけよう。

大體をいふと、日暮れまんみなみに來た——これを南中するといふ——上弦の月をみると、光つた尖端と尖端とをむすびつける線が、およそ水平にたいして垂直となつてゐる。それからよく氣をつけて見てゐると、西の方へうつるにつれ、だん〳〵仰向いてはいる。この際は夕方から夜半までゞあるから、人目に一ばんよくつく、ところがこの圖(二十五頁の下)でもよくわかりとほり、月の緣邊を弓に、明暗の界線を弦(ゆみづる)にたとへるならば、その弦が大體上向いて行くから上弦の月といふのであるが、圖の左方、地平から上るところを見ると弦は

下向きであつて次第に高くなるにつれて、上むいて來るのである。けれども地平から現はれる時は眞晝時であるから人目をひかず、弦の下向きが分らない。圖はごく大ざつぱであるが、第一の左の月が正午で、次のが午後一時。二時と南中が丁度午後六時で、それから一時間づゝで、夜半に隱れるやうになつてゐる。この圖は日本の內地に凡そ當てはまる、もつと北へよると、月がすべて立ち、南へ行くほゞ橫になるので、このあひだの變化はなか〳〵複雜なものだ。それに月の光つた緣邊はいつも太陽の方をむいてゐる。もつと詳しく言へば光つた尖端と尖端とを結びつける線は、月と太陽とを連ねた線に直角であらねばならぬ。この尖端をむすんだ線は太陽が夏至のへんにあるときは、上の方にあるから、線は稍下むき、又太陽が冬至のへんにあれば、下の方にあるから、線はわりあひに仰向く傾向がある。それゆへあながちこの圖のとほりとは言はな

いが、この圖は太陽が秋分又は春分のへんにあるときに、一ばんよく當てはまるのである。

上弦と下弦とか何もかも全く正反對であると思へばよい。下弦はさきに言つたやうに夜半に出るが、そのとき實は弦を上にむけてゐる。けれども夜半に出るのだから、あまり人が注意せず、あかつき近く天中するころ、やつと烏も雀も人間もおきでゝ、まだ寢たらないやうな眼つきで、ぼんやり空を見あげると下弦の月は弦を垂直にしてかゝつてゐるが、あかつきから次第々々に西へ巡行するにつれ弦が下むきとなり、正午に沒してしまふ。このとき、淡い一痕の月かげが、青空になやましく塗りつけられてゐるのを見ると、何だか一種いひしれぬ哀傷をもよほす。ゆふべの歡樂に飽きつかれたと云つたやうな風情は何となく胸にかすかな痛みをおぼえるやうだ。

三日月はいつでも太陽の少し東側にはべつて、日出後、あらはれしばしがほどは、夕空ひく〳〵ほのめいて、時をうつさず沈み行く。さきにも說いたやうに三日月でも其の光る二つの尖端をむすぶ線は、きつと、太陽と月とを結ぶ線に直角であるから、三日月の光つて突出した部分を顏にたとへるならば、三日月はいつでも太陽の方をこひしたつてゐると言はねばならぬ。上弦の月すなはち弓張月でも同じくさうだ。

てる月を
ゆみはりとしも
いふことは
山べをさしていればなりけり。

延喜帝のみまへで、かく詠じた凡河内躬恒はよく觀測してうまく作つたもの

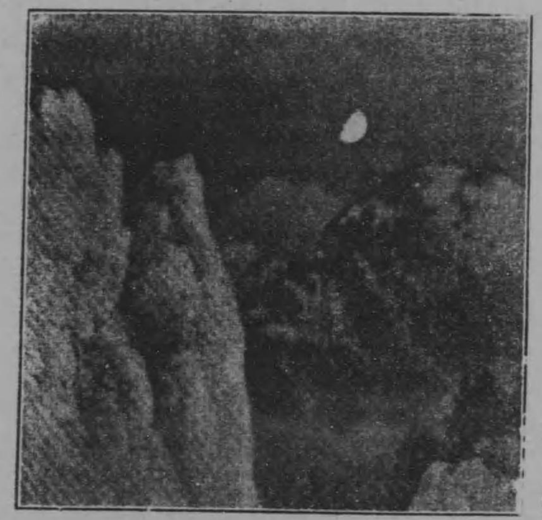
だ。圖は三日月に矢をつがへたところだが、矢の方向へ太陽は沈下したものと思へばよい。下の一の字は地平のつもりだ。

誤まつた　三日月

いにしへの人でさへ、かうした觀察眼のするどさをもちあはせてゐたのに、それにどうだ。これはちかごろ手に入れた三日月の繪だが、光つた凸面が上をむいてるぢやないか。すれば太陽はどうしたつて、この三日月の上の方に輝いてゐる理屈だから、たそがれどころか、まだまつぴるなかだ。とかく人はこの世にはありともおぼえぬ、へんてこな恰好のものを見せびらかされると、氣持のよいものぢやない。一つ目小僧一寸法師、兩頭の蛇、天狗、山姥、酒呑童子など、異形なものは女や子供をはじめとして、大の男でも氣もちのよくないものだ。それと全く同樣で、始終天然自然の正眞正銘の本物の三日月をながめてゐる人々に、こんな化け三日月を見せつけると、何だか恐ろしいやうな感じがおこる。

三日月がこんな格好で光つてゐる國は果してどこだらう。あのそれは陰火もの凄く立ちのぼる冥府のくにでもあらうか。さうだ、全くさうだなどゝと、氣味のわるいファンタシーをひきおこす。

それにしてもこんなにせお月さまを、まじめな顔してゑがいた、ゑかきさんの顔が見たいと、このゑを知り人どもに見せびらかしたら、皆がわらひころけた。あまりのおかしさに、止めどなく涙ながしした人もあつた。



この弓張月は大體無難にかけてゐる。實際月をかこうとするには、其土地、その時刻、その陰暦の日附と、この三つがそろはなければ、本當のものはかけないが、さうやかましく言つたところで仕方がないから、せめて反對の月などをかゝないやうにしたいものだ。

概していへば、新月から滿月までは右方がひかり、滿月から新月までは左方のひかることをよく呑みこんでゐるとまちがひがおこらない。

夕方のけしきに三日月をそへたつもりの繪をよく見うけるが、右下方の光るべきを左下方が光つてゐるやうにかいてあるが、あれは二十六七日ごろ　月で朝太陽に少々先きだつて出るのであるから、折角の夕げしきが、朝ぼらけに轉變するの滑稽を感ぜずにはゐられない。讀者三日月の繪を注意して見たまへ。多くは左下方のかゞやいた二十六七日の朝の月となつてゐる。尤もはじめから、あかつきの月をゑがいたばあひは咎めてはいけない。

畫家への注意　ひつくるめてゑかきの人々に注意を乞はねばならぬところは次のやうだ。

月の明暗の界線は圓でなく、楕圓にかいてほしい。

月の明暗兩部分をとりちがへてはならぬ。

機して言へば上弦前後の月は右半部がひかり、出るとき弦をうつむけ、入るとき仰向けとなる。

下弦の月及びその前後は左半部がひかり、出るとき仰向いて、入るときうつむく。

大體以上のことを念頭において月をかいたら間違ひがすくなく、又このつもりでひとのかいた月を見たらその正否を判斷することができるだらう。こんなことは今まで、あまり論じた文献を見ない。

第三章　月世界の巡遊

月の大きさ　月の運動のありさまや、又その盈虛の次第をのべたから、本章

ではいよ〳〵月そのものゝ世界に訪づれて地球の地理學みたいに記載法を應用して、月の地理學すなはち月理學（Selenography）の一般をかたらうとおもふ。

まづ月の大きさを言ひあらはすには、その直徑を示した方が一ばんはやみちだ。それでいま地球と、太陽との直徑をも書いて三つの大きさを比べよう。

月	八百八十里
地球	三千二百里
太陽	三十五萬里

この三個の數字を無意味によみ下さずに、よく比較してみると、月は凡そ地球の直徑の四分の一であることがわかり、又太陽は地球の十倍であることが知れる。

ところが月も太陽も打ち見たところ、大してその大きさのちがはないのは、

月はたつた十萬里の空にうごめいてゐるのに、太陽は三千八百萬里のかなたの空に輝いてゐるからである。

こんどは月の直徑を里數で言はずに、たゞ見たまゝをいふならば、このときは弧度(又は角度といつてもよい)で何度何分とはかるのであるが、それは三十一分四秒となる。三十一分四秒といつてもちよつとわかりにくいが、滿月を三つばかり、あのだれでもよく知つてゐる天の三つ星といふのがあるが、あの三つぼしは大抵同じ間隔をとつて一直線にならんでゐる。そのうちの一つの星のとなりの星との間へ滿月をおしこむと丁度三つばかりはいることになるから、さうおもへばよい。

又他の一方は一尺のものさしを十八、九間むかふにおいて、それと眼をつなぐ直線に、直角に置くと、そのとき見えた大きさが、あだかも滿月の直徑にひ

としくなる勘定である。しかしちよつとこゝで、氣をつけねばならぬことは、錯覺といふことで、すべて眼はよしやひとしい長さのものでも光るものは大きく、暗いものは小さく見つもるかたむきがある。それで實際滿月と、十八、九間むかふの一尺のものさしとを見くらべても、月の直徑の方がきつと大きく思へるだらう。

それからこゝにちよつと面白いことがわかるばあひがある。たとへばこの圖のやうに滿月のてる前に、一羽の狡猾さうなからすが枯枝にちよこなんと憩うてゐるが、大體からすの嘴から尾のはしまでは一尺六寸あるから、月の直徑が三十一分として、それ

からからすの長さが弧度で何分かは紙上ではかればよし、つぎに今はかつたからすの弧度の長さをかんがへて、一尺六寸のものがこの長さに見えるのには、何間はなれたかを勘定すると、すぐ烏とこの繪をみてゐる人との距離が二十四間として出て來る。かやうにして又繪の中の一つの物體とこなりの物體との距離だつてわかるはづだ。

それらの勘定法はちよつと數學をかぢつてゐれば何の苦もなくわかるけれども、今は面倒だからはぶいておかう。

あんまり數字をならべたてゝも、おもしろくないから簡單にすますが、右のごとくで月の直徑がしれた。つぎはその容積はどれほどかといふに、それは地球を一とすれば、太陽はその百三十萬倍にもおよぶのに、月はわづか、地球の五十分の一にしかあたらない。

重量はいかにといふに、これも地球を一とすりや、太陽が三十三萬倍となり、月はたつた地球の八十二分の一にしかすぎない。

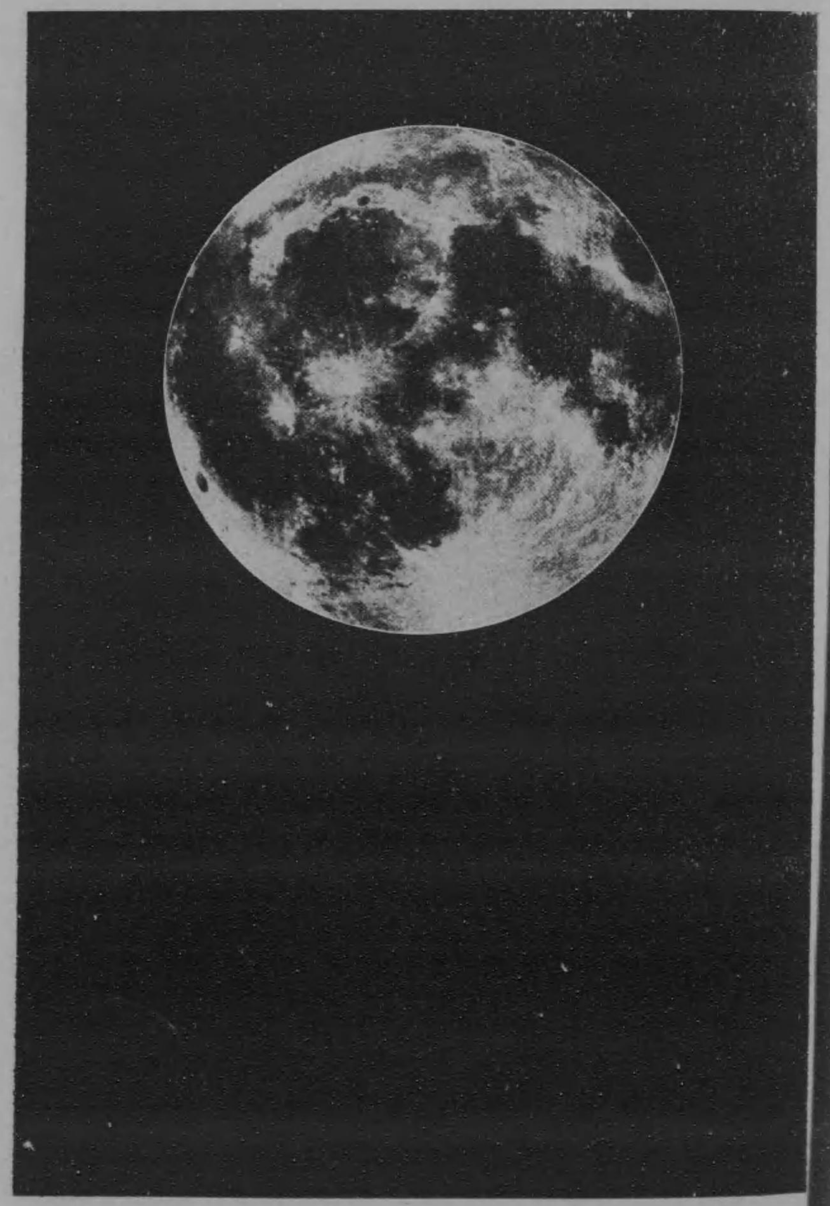
ついでにもう一つ、數字をつけ加へる。比重といふのは一升なら一升の水が、重さがどれだけと測つて、次ぎに木とか石とかを同じく一升のかさをつくつて測る。そしてその重さが水一升の何倍にあたるかを見る。三倍だつたら比重が三、四倍と出たら四と、かういふわけだ。つまり水の何倍かを見て、その倍數が比重といふ仕儀だ。それぢや一つ地球の比重をしらべて見たら、どのくらゐと出るかといふに、いろ〳〵學者のやつて見たところでは、地球全體うちがはも、そとがはも。つき交ぜて勘定したら五・五とあらはれた。すなはち地球はその重さが水の五倍半となる道理だ、

そんなら太陽はどのくらゐかといふに、それは僅かに一・四で、水の一倍半

にもあたらない、ごく〳〵輕い天體である。それだからこそ、その容積が地球の百三十萬倍もあるのに、その重量は三十三萬倍しかないのである。月はその比重が三・四で水の三倍半となるわけだが、この三・四といふのは、地球の外殼を形造くる岩石の比重の二・九と似よつた價であるのは注意せねばならぬ。一ばんあとに述べるが、そのむかし月は地球からちぎれてとび出したものだといはれてゐるが、この月と岩石の比重の似かよつてゐるのも、その一つの論據となるのである。こゝにもう一度月、地球、太陽の容積等をならべてみよう。

天體	容積	質量	比重
月	八十二分の一	五十分の一	三・四
地球	一	一	五・五
太陽	百三十萬倍	三十三萬倍	一・四

月の表面　月の大きさと重さとの觀念を得たから、つぎにはいよ〳〵その



眼の人は、人いよの眼肉は人るあの鏡眼雙又、しよもで、まのそ眼肉は人いよの眼
鋏の木一と甲の蟹に何如、の分部い暗のそ。へ給見き覗てつ取を
。うらたるかわがさこるゐて似に

表面がどんなになつてゐるかを探險せねばならぬ。探險にさきだち、その表面の大觀をいふなら、目でも又雙眼鏡でもわかるとほり、滿月のときなどは大體あかるくひかる地に、ところどころ、うすぐらい紋樣が、べた〳〵とはびこつてゐるのがよくわかる。

このうすぐらい部分をたゞぼんやり、あふむいて見たゞけでは、ちよつと目をそらせば、もうすぐ忘れはてるが、その輪廓を何かのものに喩へて記憶しておくと、案外いつまでたつても忘れないものだ。丁度地理の先生が、四國を蝙蝠に、九州を猿、北海道を鱈などに見立てゝ、生徒のあたまにつぎこんでおくと、生徒らが忘れようともがいても、忘れられないと同じだ。

そこでこの妙案を月理學に應用もせねばならぬ。月面の薄ぐらい所は、はて何に見立てたら……と首をひねるまでもない。それは蟹だ。まつたく蟹だ。た

つた一本の大きな恐ろしい鋏をふり上げた。いかつい蟹の甲羅が、お月さまにきゆつとしがみついてゐる。うらわかい男と女とが、あたりを見ました後、しつかと抱擁するやうに。お月さまと、蟹の奴とがからみあつてゐる……と、かういふ比喩をいうておくと、ちよつとおもしろいから、だれもわすれつこはない。しかし片手蟹では色消しで、どうも美しいお月さまの顔にはそぐはないから驢馬としてはどんなものか。ところが、驢馬といふやつもちぢむさくていけないから、もう一段の工夫の功をつまねばならぬが、少女の讀書としたらよからう。

なるほど、こいつはよからう。黒い顔の、黒い顔の、黒い手の少女が、黒い本をもつて讀書してゐる。がどうもかう黒いづくめでは、別にうつくしいとか惚れ〴〵しいとかの感情をおこせとは、ちと無理な注文であるから、もう少し何とか考へがつきさうなものだ。

月面を色々の形に見立てたもの。上右は驢馬、上左は少女の讀書。下右は蟹、下左は婦人の横顔。

あつたあつた。それは西洋婦人の蠱惑的なよこがほだ。さうすれば黒い髪に白いかほがはつきりと、満月面にうきだして、うつくしいお月様は一層ひきたつて見られる。

美しい婦人の浮きぼりされた月面をあふぎつゝ、共に手をとり、蟲の音の、しきりにすだく、秋の夜の野路を逍遙したら、ちと月並だが、まんざらわるくはなからう。

そこで、いよ〳〵月世界のこまかい模様をさがしはじめる。

月の面のくらい部分は昔の人は海だらうと想像して一々、なまへをつけた。そのくらいのは別に水があるわけでもなく、又は特別光つた部分よりひくいのではなく、表面をなす岩石の色合がくろずんでゐるからである。あとに詳しくいふが、月の表面はすべて殺風景な岩石でおほはれ、水も植物もなにもないこ

とをこゝでちよつと一言しておく。

そのくらい部分の中、蟹の鋏のすぐちかくに一つぽつつりあるのが、危の海と呼ばれ、このあたりは三日月のときにひかるから、その三日月から上弦、上弦から満月へかけて、いつでもよく見える。すべては圖を見られたい。そして圖の上下が、南北、左右が西東であることに注意されたい。

危の海の上(實は下に見えて、それは南だ)に鋏の一部をなすのが豐饒の海、

和の海、晴の海と三つであるが、これは實際目でもよく見える、いちじるしいものだ。甲羅にある部分で下方が雨の海といはれてゐ、そのほかまだあるがやめておかう。海といつても別に漫々たる洋水を湛えるわけでもなく、海藻がしげり鯛やひらめのおよいでゐるわけでも決してない。から〳〵に乾いた荒野だ。

たゞしそれでも、大昔には水がゆたかに湛へられてゐたゞらうといふ人もあらうが、前にもいつたとほり、海といつても、別に低地でなく、又實際そのむかし海洋であつたら、その水のひあがつた今日は、その海底が水成岩にしきつめられてゐなければならぬ勘定であるが、さうすると、水成岩は普通岩石のより少々餘計にひかるべきものだが、事實はかへつて反對で、あかるいどころか暗くなつてゐる。それで見ても昔時海洋であつたとの說はあやふげなものだ。

月の面にはどこでも、海といはれる部分でも、さうでないところでも、ぶつ

〳〵と水の泡のやうなものが、たくさん散在してゐて、人間のあばたづらのおもむきがある。望遠鏡などでのぞくと、この水の泡がたくさんむらがり、きら〳〵光つて何ともいへない美しさをあらはして、非常に人目をよろこばせる。いつたい、この泡はなにものかといふに、むろんしつかりしたことはわからないが、昔月のなほ今のやうに冷えきらない際、その胎内から熟した内容物のさかんに噴出した拔け穴のなごりだといはれてゐる。吾人が糊をにると鍋の底にできた水蒸氣が糊のうはつらにむくれ上つて、たゞ束の間の穴をのこして消えていく。あの束の間の穴みたいなものが、同じ道理でやはり往昔、活動の熾烈であつた時代に月面にでき、それがいつまでも殘つて今日にいつたのが、あのたくたんの水の泡で、それは噴火口にいはれてゐるが、これは多分名實ともに噴火口であらう。

地球上にはさうも多く、噴火口があるわけでないのに、月にばかりどうしてあんなに數が多いのかと、よくいぶかる人があるが、それはかう解釋するのだ。地球だつて大昔から出來た噴火口を一々にそつと保存すれば、今までに隨分おほくの數がたまつて、月と同樣にみにくいあばたづらになつたであらうが、誰も知つてゐるとほり、地球上には雨や雪がふり、又風が吹きあれる。そのために出來上つた噴火口も當座のうちこそ、その形體を保つてゐるが、長の年月のあひだにはたとひ少しづゝとは言へ、あしたにゆふべに、けづりとられて、遂に跡方もなくなつてしまふ。それで今あるのはそれはわりあひに新らしいものばかりだ。

それにひきかへ、月の世界には、ちつとも、雨や風がないから、一旦出來上つた噴火口はとこしへに、そのまゝの形を維持し、あとからあとからと噴き出

す火口は、次第にその表面全體にゆきわたり、そのため今吾々の望遠鏡裡にうつるやうにところどころに無暗におほくあるのである。

これらの火口の中で、最も人目をひくのは何といつても、圖の上方に高くそびえるチホ山である。その高さは一萬七千尺にも達し、富士山などよりよほどすぐれてゐる。なぜ月の山はこんなに高いかといふに、地球の表面とちがつて、月は引力がよわいから、その表面の上の物體がはなはだ輕く、その強さは地球上での六分の一にしかあたらない。たとへば地球上で六貫目ある物質を月へはこんだら、一貫目に入つてしまふやうな次第であるから、力の弱い人、なまけものなどは、月世界へ生れかはつて、勞働にしたがふと、大變骨がおれないから結構だ。

右樣のわけで、同じ火山の噴出力でも、月では餘計にきゝめがあるから、どうしても中空高く溶岩などが拋りだされて高く火口をきづき上げたのだらう。

そして千木山の火口は二十二里の直徑をもつてゐる偉大なものだ。

この千木山が、最も著名となつたのは、それが高いばかりでなく、それから四方八方に、蛸が足をはりひろげたやうに、かゞやいた美しい縞が放射されてゐることで、その縞は山といはず、谷といはず、何物をものりこえて、一直線に走つてゐるのは、とても地上では見られない奇觀である。

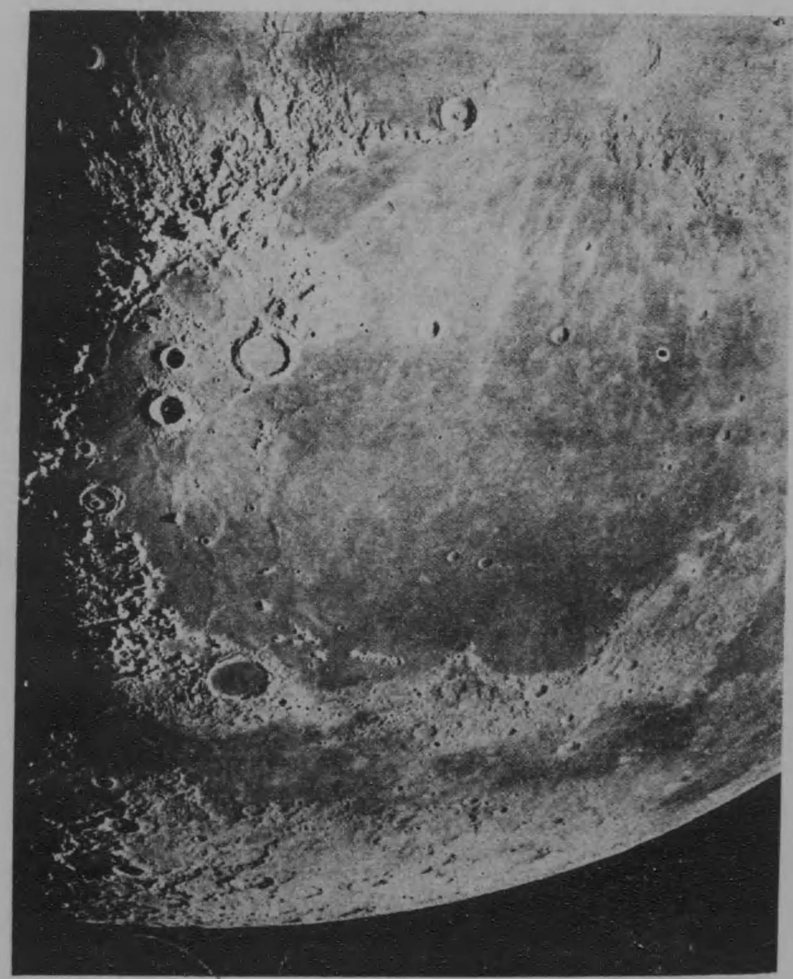
蟹の甲羅のまつたゞなかに聳えるのがコペルニクス山で、高さは千木山より少しひくゝ、一萬一千尺あまりであつて、直徑は千木山と大差ない、(別圖第二參照)。この山も亦千木山の眞似して、そのまはりに、はなびらの開いたやうに白い條紋が放射してゐる、千木山ほどの壯觀は呈してゐない。

コペルニクス山の右手にケプレル山が聳えてゐて、やはり放射狀の條紋にか

こまれてゐる。この三つの火口はその附屬がよく目立つので、誰にも一番さきに記憶さるべき山である。

まだどのくらゐこんな噴火口があるかも知れないが、さう一々こまかく山名を一旦は記憶しても、何れ忘れて終ふから、初めから、覺えない方がましだ。只雨の海の下にあるプラトー山（別圖第二にもこの邊が見える）が直徑が二十四里に及ぶ大火口であつて、又晴の海の中のリンネ山は極めて小さいけれども、この山が現はれたり、消えたりするといひだした人があるので中々有名となつた。

月世界の水と大氣　以上であらまし山や、所謂海を見たから、つぎにはこの月の表面に大氣や水があるかないかと論じて見よう。もしやこのわが隣りの世界が、あだかも地球のやうに大氣で濃くつゝまれてゐたならば、ときどきに雲や霧などがおこり、雨やみぞれもふり下り、風がそよぐやうな光景を



これは米國ヰルソン山天文臺口徑百吋大反射望遠鏡で撮影した月の弦の部上（目で見たのは上下顚倒する）中央は雨の海、左下方の楕圓形の噴火口はプラトー山。

みせてくれて望遠鏡でのぞいても、ほんとに張りあひがあるわけだが、あひにくごく少數の人々を除いて、月の世界にかゝる氣象の變化のあることを見つけた人はないのである。たとひ少しばかりでも、地球をつゝむ大氣の何千分の一の薄さの大氣でもあつたら、月の寫眞をとつたばあひ（別圖第一、第二參照）、あんなに表面の模樣がくつきりうつるはずがない。そして山のかげにしても、いくぶんぼやけて地上に映ずるはずであるが、事實はさうでなく、いかにも山のかげははつきりして、かつて朦朧となつたことがない。

それからもしや、うすい雲でも、又霧でも、その表面上にたゞよふやうなことはないかと、隨分あてにならぬことをあてにして、目をみはつて探した人もあるにはあるが、一べんも雲などのために月面の部分がおほひかくされたためしがない。

そのほか月は天空上を進むにあたり、ときどきその背後の星をおほひかくすことがあるが、その際よく氣をつけて見てゐると、月が次第に星によつて、行き、今やこれを隱さうとする刹那、ほんとに月面に大氣があるなら、星の光りは先づもつて、その大氣にさへぎられて、おぼろげとなり、かつ見かけの位置がその星の光りが大氣中をとほるために、其進路が少しかはるから、月のふちから、稍はなれねばならぬわけだが、事實においては、月がまさに星をかくさうとするや、一時にぱつと星の光りは消え、次第に暗くなるやうなことはない。

それから日食にしても、あれは月のくらい影が、太陽のかゞやいた面をふさげるのであるが、もし月に大氣があるとしたら、暗い月のふちが輪のやうに光るべきであるが、これも實際そんなことはかつてない。

そんなら月には大氣が初めからなかつたのか、又初めはあつても途中から、

消えうせたのかといふに、實のところ、この月の表面には元から、あまり多くの大氣があつたとも思はれない。又よしや一時はあつたとしたところが、大氣すなはちガスは、その分子がいつもえらい勢ひで勝手に運動してゐるが、地球はその引力がつよいので、ガスの分子のにげないやう、しつかとつかまへてゐるが、月は先きにもいつたごとく、わづかに地球の六分の一にしがあたらないよわい引かしかもたないので、どうかするとこの氣儘なガス分子の手合は、左樣をならして、とほいとほい空間のあなたに出奔してしまひ、あとにのこされたお月さまは、赤裸となつてしまつたのである。又一說には、表面を構成する岩石のすきまに吸ひこまれたとも傳へられる。

又の大氣のない證據は、その月面のがゞやき方を研究して得られたのである。月のひかるのは言ふまでもなく日光を反射するからであるが、その反射する割

合はまことに少なく、受けた光りの一割七分しか反射しない。地球なぞのやうに濃厚な大氣におほはれてゐる天體は外部から望み見たら、たしかに、その受けた光りの五割は空間にてりかへしてゐる。それで見ても月面に大氣なしと推の定は決してあやまらないところである。この一割七分といふ反射の割合は地上の岩石の反射する割合にひとしいことから考へあはせても、ます〳〵この信念のかたくなるばかりだ。萬々一、大氣がいまなほ存在するにしても、その稀薄さは地球の大氣の千分の一以下であらうといはれてゐる。

これで大氣のないことは決まつた。それぢやこんどは、水があるかといふにこれも亦全くないといつて差支へない。もしや水があるとしたら、今のべたごとく、大氣がなく、したがつてその壓力すなはち、氣壓といふものも全くないから、水があれば、たちまち蒸發して水蒸氣が月の空をおほふことなる。すべ

て水は氣壓がなかつたら、熱せずともすぐ蒸發するから、高山などでは氣壓が少ないので、水をあたゝめても、ろくに温まらないさきに蒸發しだすのだ。

しかるに前にのべたごとく、月面をおほふ何物もないところから推すと、水も亦ないことになる。又よしやそんなことはないけれども、水が蒸發せずに、地面にたまつてゐるとすれば、その寒帶地では凍つて雪か氷となり、それが白くかゞやいて吾々の眼にとゞくはずだが、そんなことも誰も見ない。それから海といはれてゐる暗い部分にしたところが、ほんとに昔の海であつたら、水成岩が沈積してゐなくてはならぬはずだが、やつぱり他の山嶽地方とおなじやうに火成岩で一ぱいになつてゐる。

こゝにおいて、月世界に大氣と水を求めようとしても、結局それは失敗におはるべきで、あだかも比丘尼の何やらを見ようとあせるのと同じ筆法で、でき

ない相談におはる。

これから月面の温度とその晝夜とを考へてみよう。地球は凡そ二十四時間で一廻轉するから、その半分が晝で、他の半分が夜であるが、月は太陽にたいし二十九日半で一まはりすること、なつてゐるから、その半分すなはち十五日足らずが晝で、又同じ日數の夜がある。さつと半個月の晝と、半個月の夜とがこもごゝ循環してゐる。それであるから、まつぴるなかの月の區域は、あいのあくないのと論ずるまでもなく、何もかも燒き焦されて、焦熱地獄を現出するに至る。その温度は攝氏の沸騰點すなはち百度以上にのぼり、又その反對に半個月の夜が來たとなつたら、温度は急にさがり、攝氏の氷點下二百度にもなるだらう。どんなものでもこんな寒さにあつたら、忽ち氷結する。それに大氣も氷もないから温度を調節することができず、その影とあかるみとの境がはつきり

してゐるやうに、夜と晝との境ひ目で、温氣が急激に變化するから、とても大氣や食糧を持參しても、一日も半日も居たまらずに、にげかへらねばならないであらう。

月世界の晝の景色

けれども、できない相談だが、かりに人類がこの月の世界に旅行して、生命も安全で、健康も相應にたもたれたとせよ。そしてその山谷や平野を跋渉したら、どんな光景が眼前に展開されるかを想像しよう。

それが眞晝の地方であつたとすれば、太陽がその月の大空に赫々たる輝きをみせてゐることには、別段かはりはなく、そしてその大さも地球の空に出てゐるのとおなじことであるけれども、ふしぎなことには太陽のぐるりにも、はなれところにも、丁度地球のはれた夜みたいに、否なもつときれいに、數千數

萬の星辰が金砂をまいたやうに光つてゐる。さうして地球上でみるやうに、いやにきら〳〵はしないのである。

なぜ白晝、星がみえるかといふに、地球上では、濃密な大氣があつて、太陽の光りが、その大氣中にはいつて來ると、すべて散らしてしまつて、空一面にはびこるやうにするから、折角星の光がはいつて來ても、あまり之れは日光にくらべて、かすかであるから、散つた日光に消されてしまふ。それだから晝間は星が見えないが、月ではそんないたづらする大氣がないから、小さいながらも星は太陽と同じやうに肩をならべてよく光る。

又地球上で星のきら〳〵するのも、大氣には稀薄なところや、濃密なところがあり、そこを星の光りが通つて來るものだから、振動させられて、あのやうにきらつくが、月ではさういふことがないから、小さい星の光りも、非常によ

くおちついて、しづかである。その上、大氣があつて、星の光りを吸收してしまふやうなことも絶對にないから、ごく小さい星までも、よくその姿をあらはしてゐて、非常に空がにぎやかである。又曇天や雨天は無論なく、風が吹きあれないから、まことにしづかでよい。大氣があつて音の波動をつたへることもないから、地球上でなら耳をつんざくやうな大爆發がおこつても、少しも聞えないから平氣なものだ。音といふ音は金輪際きこえないのだ。

月世界の夜の景色

さて夜の世界はどんなかといふに、まづ闇夜でなく月夜……いな月へ來て月夜はみられない。月のかはりに地球が月世界の夜に大きく仰々しく照り冴えてゐる。地球の直徑は月のそれの四倍であるから、地球から月を見たより、四倍の直徑にみえる地球が大空にかゝり、そのぐるりにこまかい星が文字通り綺羅星のやうに排置され、地球の月夜

であると、月明かにして星稀れといつたやうに星が月の光に掃き去られてしまつてあまり餘計に見えないが、月では大氣がないので月はは少しも遠慮なくはつきり光る（口繪參照）。

げに靜寂きはまりもない月の地上に、大きな顏の地球が、しかもその表面に大氣があるので、まるで鏡のやうに、あかるく照らすさまは、何物にもたとへられない美しさである。

そしてその地上には底ひもしれぬ絶對の沈默が、すきまもなく行きわたり、あちこちには見上げるばかり嶮岨な噴火口が、空たかくもり上り、雨風がなく、動物などもゐないので、山腹におかれた一つの小石も永遠にそこの場所にとゞまり、いつまでたつてもすべりおちる時機はこない。實に月には動きあたふものが一つもないので、一つの小石や、砂利でも一旦ある位置におかれたら永劫

にそのところを去らず、さびしさ、しづけさを極めてゐる。

見わたす荒原は眞に荒原であつて、四季の變化などは夢にもない。ほんに愛慾のきづなの切らうとしても切れない吾等一切衆生が、臍の緒をたづさへて母體の扉をおしひらひて生れ出た、さわがしい、わづらはしいこの娑婆世界には時と所をえらばず、花々しい、うらさびしい、さてはうれしい、かなしい色々な舞臺がこもぐ〜廻り燈籠のやうに展開されて、耳目にすこしの無聊をも感じない。

例を四季のうつりかはりにとつて見ると、靑野に咲きみだれる赤い蓯（ちがや）のはなに、白い蝶々が口づけし、高い雲雀がこまやかに、わめいてゐるかと思へば、もうぢきに裏口であたりに氣をくばりながら行水する若い女の白い肌に紅色の合歡（ねむ）のはなが降りそゝぐ、尙も時季が進めば、夕ぐれどんぼが、入日のはかな

い空を滑走するやうになる。それから又秋風身のしむころともなれば、みやまの櫨の葉から血がしたゝり、田圃の稻から蝗がすべりおちるかと見れば、早やいつしか山寺の尼僧のまるい顱頂にさゞんくわの花びらが輕くいこひ、ひよどりが枯木林で、ピーヨピーヨと妻をよぶ季節となる。げに變遷きはまりのないのは此の娑婆世界である。

人間の社會をつら〳〵觀じてみても、こちらの家ではきれいな花嫁をむかへて、一家一族よろこびさゞめくかと思へば、あちらの家では結核患者が金盥に血をにいて逝き、六親看屬あつまつて、なげきかなしめどもさらにそのかひなし、はちと抹香くさい文句となつた。又一方では專門學校の入學試驗に僥倖し、よるひるつめこんだ腦髓を一時に、ぺこんとへこまして、太平樂をならべてゐる生徒もあれば、他の方では惚れた女に落第して、つくづくと世をはかなむ弱々しい

青年もある。又昔のことをかんかへても、親鸞上人などは諸國を巡錫して、部落の人をもらさず教化したこともあれば、今は小まめな社會主義者がはる〳〵東京から地方へ下つて、小作人を應援するやうなこともある。げにこの地球上の有ゆる有樣はさま〴〵に變化するが、月の世界では、地球上で興行されるやうな喜悲劇の一くさりだつて見られはしない。たゞもう永〻の閑寂をこちやぶる何物もなく、時おり小さい流星が光らずに落下して、地上にころがるのみた。

何處へ行つても峨々たる岩角が地球の光りにてらし出されて、半面はいみじく光るが、またの半面は、まつくろな影につゝまれて氣味がわるいほどくらいさうしたむくつけき岩塊の吃立する荒原は見るだに、悽愴な感がとめどなくおこつて、あゝ早くふるさとの地球のあたゝかいふところに歸りたいあとせるやうになるだらう。

月が尚生きてゐるとの説

それでもかつて海の中にあるリンネ山とて直徑十町あまりの小噴口がときゞ〳〵見えたり、かくれたりするといふので大問題となつたが、どうもあてにならない。ブラトー山の中には小噴火口や小さい突起のやうなものが散在し、それらの樣子が時々少しづつ變化するともいはれ、又そのへんを時々白雲が翺翔するともつたへられたが、どうも本物とは思へない。しかし唯机の上ではかり否定してはいけない。否定するなら、自分も亦、主張者とおなじやうに觀測につとめた上で、態度を決すべきである。

又あるところの谷合から雲や霧がさまよひ出で、ひくい平野へとながれ出したのを見たとも、山腹や谷などに下等植物のしげつてゐる形跡があるとも、且つまた、二三の噴火口から迚々しい煙が、立ち上つたとも稱へる人があるが、

どうか願くばさうであつてほしい。今まで死んだとばかり思つてゐたお月樣にもまだ一脈の血がかよひ、時々ゐねむりからさめて、噴煙したり、雲をまはしたりするならば、どんなにどんなに吾々はよろこぶだらうか、たとへやうもない次第である。

第四章　四季の月の頌

夜の世界

以上三章で月の運動、月の盈虛、月の本體もあらまし天文學上の事柄をときすましたつもりであるから、本章では先づそれらの知識をあたまにおいて、四季に應じていかに月のてらせる夜の光景が變化するかを、徐ろに考て見よう。

本書の目的は月そのものを說くのは第二であつて、主としてこの月にてらし

出された夜の世界の美しさを讃嘆しようとするにあるから、月夜をとくまへに月をといたから、次ぎに夜をとき、しかる後に月夜と、かういふ順序にするつもりだ。

そも〳〵夜とはいかなるものぞと、ひらきなほつてとき出すのは、餘り仰々しいが、すこしだけ天文・上の知識を加味して説明しようなら、日がくれたら夜だけでは、あんまりあつけないから、もつと勿體をつけて言ふならば、元來地球はまぶしい日光にさらされながら、始終太陽のぐるりを、自らも廻轉しつゝ進んで行くもので、自體の一まはりが一日、その軌道の一まはりが一年となる。ところが自分自身がぐる〳〵と一まはりするとき、太陽に面した方は晝となり、それにそむいた方は夜となる。夜は地球が自分自身のかげでこしらへた、至つて太陽の近傍では範圍のせまい一區域にすぎない。

かういふ具合に地球が自身でこしらへた影のなかへ、或る人々の住所が廻りこんでいつたら、それがつまり夜となるのだ。しかし自身が動くことはわからず、かへつて太陽がうごくやうに思はれて、吾人はしつかとした大地に靜止してゐるかのごとく誤解する。

とにかく見たところでは、あした東の地平をさし上り、日ねもす大空から暖かい明るい光と熱とをこの大地にそゝぎかけ、生きとし生ける物みなは、その恵みめぐみのもとにすく〳〵と茂り榮えて行く。かくて時刻もやうやくうつり進むと、五彩の雲のよこにたなびく西の空にかたむき、あゝくたびれた、くたびれたと、ほつと吐息しつゝ、山のはに音なく、すり〳〵と落ちこんでしまふ。

さあかうなると、地上の舞臺にひるま、活躍してゐた主役、端役のけぢめなく、すべての役者どもはみな屏息して、新らしい、ひるまはねむつて英氣を、

うんとやしなつておいた面々が、今こそ時來れりと、小踊りしつゝとび出して來る。

まづ舞臺そのもの、變化の次第をしるすなら、日の入りごろともなれば、一日、野原のまんなかで、手足をびん〳〵させて、もがいてゐた農民どもは、そのひもじさに追ひたてられて、路草の上に水つ洟をなげかけつゝ、藁屋の女房が支度の夕餉へといそぐ。路の上や、田んぼの中でいたづらばかりしてゐた烏のやつらも、日がくれると鳥目だから、方角のわからぬやうになるのに氣をもみ出し、あわてくさつて、があ〳〵と互にあとにつゞく友をよびよせながら、どけか山の木賃宿みたいな、つまらんねぐらに羽ばたきをよせあつめる。

かうしたあわたゞしい時には、もはや闇のとばりが猶豫もさせず、むかふの森から、ひたおしに押しよせて、老若男女の差別なく目かくしをするので、人

々はにはか盲となつて手さぐりでやつと用をたす。

しかし都會ではたそばれとなれば、市街に一時にぱつとうすぎたない電燈がよごれた塵の立ちまよふ空氣の中にほのめき出すから、手さぐりの不便もなく、これからが遊びどきと、いきり立つわかい男と女の胸のどよめきはたとへやうなく熾烈なものだ。

市街といふものは大地の面積のごくわづかしか、占領してゐないものであるから、今は主として田野の夜の光景をのべねばならぬ。

靜かな、音もせぬ夜の空の空氣を游いで第一番にとび出して來るのは蝙蝠の一むれで、かなたこなたと危ぶなげにとびあるいて餌をさがす。こいつとらへて見ると案外かはいらしい、自分の戀人の幼な時代の顔そつくりだと思つた。

ほーほーつと、ごらごゑで梟めが、林のしげみでうなりはじめた。あの大き

い物凄い飛びあるきかたは、なるほど夜の畑でこそ〳〵と野菜をかぢる野鼠の一ちゞみとなるのも無理はない。だが一ちゞみとなつたころは、もうそのいかつい爪につかまれて木の枝に、かひなきもがきを繰りかへさねばならぬ身の上になつてゐるのだ。

からだは小さいが木兎（みゝづく）のやつ、梟とおんなじやうなつもりになり、所作（しよさ）もかなはぬくせに、二つの耳を角だとおどかしつゝ、これも又夜の世界を横行する、こいつ中々お愛嬌者だ。よたかといふのも、ぬからぬ手合だ。人間の中にもよたかといふ一種類があるが、餘計なことはおいて、地べたには今なにごとが發起しつゝあるだらうか。ひるなかは奥山のいばらの中に日の光りをあびて、細目してねむつてゐた、狐だの狸だのゝ連中が、うすやみにぱつと炬のごとき眼を光らせ、のそりのそりと人里ちかく、はひ出して來る。

これらの獣はみな勇敢で機敏で、どことなく文明人種のおもかげをそなへ、野につちかはれた野菜や穀物の害敵たる鼠のやつばらの首根つこを押へるに妙を得てゐるから、たまに鷄の一羽ぐらゐは奉納しても算盤のあはないわけはないと思ふ。

けれども時々、ぼんやりした田舍の間抜けづらどもが、やゝともすると、この狐や狸に山や林へつれられて、なぶり物されるいふので、人々は目の敵にして、つかまへよう物なら、すぐぶんなぐて殺してしまふが、あゝ、ほんとに無知な人間ほど始末の悪いものはない。吾々の農作物を間接に保護してくれる狐や狸に禮をいふどころか、あべこべ虐殺する。こんな恩知らずはどこへ行つたつてありやしない。又ばかされるのを怨んでゐる手合もあるが、それは獣の仕業でなく、自分自身の魂のうかれだすのだぐらゐは、催眠術の實驗を一度も見

れば、誰だつて合點のいくことだ。

こんなまつくらにして、色々の暗闘――それこそ文字ごほり――のおこつてゐる地べたを、目をしばたゝきながら、かず〳〵の星は物珍らしげに見下ろしてゐる。大きいのや、かすかなのや、星にも色々の差等がある。またその色彩でも、ルビー色のあか〳〵したのもあれば、サフアイヤのやうに青くほのめくのもある。それかといつて又トツパースにもまがふ黄色の星もないではない。それらのうつくしい、あまたの星が、あだかも寶珠をまいたやうに、夜の空をかざり、闇のさびしさをなぐさめてくれる。

これらの星の一々を仔細にしらべるのが天文學者の役目であるが、今その役目の次第を物語りたいとは思ふけれども、先きをいそぐから、それは思ひとまつて、唯この夜が如何に經過して行くかをかきつゞけよう。

夜も次第に更けて夜半ちかくとなれば、夜の動物は一層活動するかはりに、人々には雜談にあき、歡樂に滿足して、みなそれ〴〵の床に辻褄のあはぬ夢を結ぶこととなる。ところが中には物好きな商賣もあるもので、世間の寢しづまつた頃に、わざ〳〵身にしむ夜風を頰冠りでいとひながら、戸毎の雨戸のしまりをしらべ歩るき、戸締りのにぶい家だと見ると、たちまちふところに忍ばせた、鑿(のみ)をふるつて、それをこぢあけ、手あたり次第に荷物をはこび出し、マツチと蠟燭の燃えさしをすておいて、さつさと引き上げていく。濱の眞砂はつきるときがあらうとも、この商賣人の種は中々つきるときがないとか聞いた。

もう一つ變な商賣は、これも晝間はさして用がないから居眠つてゐるもの、道の辻にぱつと電燈の花がさくころからそろ〳〵と支度をし、隣りの家では勤めさきから歸つた主人公が、わかい妻や、あどけない子らと、晩餐後のむつび

言をしてゐるのを、よそに見て、のこ〳〵と器械の据えつけてある天文臺などに行き、身のたけより長い巨大な望遠鏡をぎい〳〵とうごかす。もうこゝまで言へば何商賣か無論わかるはずだが、かうして夜もすがら、あの底しれぬ空間の深淵にまでおもひをはせ、宏大なる宇宙の眞相を止觀して夜露にうるほされるのも忘れはてる天文學者は聖者か、はた又、痴漢かどつちだらう。

夜半までは未ださして事件もおこらないが、だん〴〵夜の舞臺がしん〳〵とかすかで、しかも底力のある波動をおこしながら、更け行くにつれ、そのころは市街でさへも按摩の笛や、電車の軌しりは、はたとやんで、夜の空氣が一おちつきするのだから、まして田舍のわびしい住居では、何ともかんともしやうのない靜けさと、物すごさが、室内にひた〳〵と漾よひ、たゞもう鼾のこゑがほのかにひゞくのと、天井からぱら〳〵鼠の糞がおちるのみである。

するとあの草木もねむる丑みつ頃が、有ゆる音とひゞきをおさへつけ、嵐の前のしばしの凪ぎといつた調子に、今やおこらうとする事件を待ちうけてゐるかのやうに見える。

や〳〵あつて座敷の簞笥のあひだにする〳〵つと異樣な衣づれの音がしたかと思ふと、髪ふりみだした……。おつと餘り圖にのつて書いて行くと、どんな大事が出來するに至るかも知れないからもう打ち切りだ。

かうした身振るひするやうな、臆病者や子供にとつては、いやないやな夜も、赤い帽子のくだかけが、いきほひ込んだ羽ばたきの、その後の一うたひに、ひきはがされて、やがて東の空に曙の光りの、一帶にみなぎるころに至れば、跡方もなく消えて行き、夜つぴいて空を仰いでゐた聖者も、ほつと一息つきながら、はじめて己のが家のあた、かい床におひかへされる。

あかつきの光りの東天に汪溢すれば、あとからすぐ、赤色や黄色の雲がいと身輕に朝風にふかれつゝ浮動する。すると金色の後光が先づ天に冲するかとみれば、間をおかず、地平の上に大きな血色の日輪が開花する。これで全く夜はかたついて、いよ〳〵今日も亦、人間は苦しい生の一もがきに肉も骨もすりへさられてしまはねばならぬのか。

かう言ふと、いかにも夜は恐ろしい、いやなものになつてしまふが、沈思瞑想したり、安眠休憩したりするには、却つて夜間の方が適してゐるから、滿更、さう嫌つたものでもないが、矢張り人間は、どうしても、光りを慕ふ動物であるから、日がくれると悄然とし、夜があけると、俄かにはしやぎ出すのも無理はなからう。

まあ大體右にのべたやうな有樣で日はくれ、夜はあけはなれるのだが、この

夜の世界の闇をてらすに、天上に一痕の月があれば、どれだけ地上は美化され人間は慰藉されるかわからない。そこで今四季の月夜の各の特色をたゝへて、吾も他人も共にそのたのしみを分かたうと思ふ。

四季の滿月の高さ　それまでにちよつとのべておきたいのは、滿月は丁度太陽の正反對におこるから、冬至のときのやうに、太陽が非常に低い空にてらせば、その頃おこつた滿月は中天高くかゝり、これに反して夏至のころのやうに、太陽がはなはだ高いときは、月はかへつて低い々々空にほのめき、春分、秋分ごろは太陽は高くも、低くないから同じく月も高からず、低からずの邊に冴えわたることゝなる。勿論これは滿月のことだけで外のかたちの月にはちつとも當てはまるものではない。つまり、寒い時の滿月は、大體たかく、暑い時のは、低いのである。ところが、三日月や新月は太陽の近くに見えるか

ら、太陽が高く天中する時は、矢張り高くまで上り、太陽が低く天中する時は、同じやうに低くしか來ない、それで、滿月が高いといふのは、滿月だけのことで、ほかの形の月まで言ふのではない。

春の月　春の月から初まつて夏、秋と順押しに行く、遠い々々山の頂にかぶさつてゐた雪の衣が次第々々にちぢまつて、殘んの寒さのまだ中々暴威をふるふそのうちにも、春の三月ともなれば、どこともなく人々の魂は身輕に浮き上るやうに思ひなされ、小溝にながれる水も、あまりひどく手を刺さなくなる。

雪や霜にも屈せず、この寒空にまつさきかけて咲きひらくかず〳〵の花の中で、わけても梅の花が一ばん多くむらがつて咲く。ことに初春にひらく花の常として、むせびかへるほどにほふその匂ひは、月の夜にその花の所在がわからずとも、たゞ香をかいでそのあることを知り得るくらゐである。

梅の頃の月夜は未だいくぶんの寒さをおぼえるが、その清楚な月光が、純白な花の上に、しづかに慰うてゐるさまは、まことに見る人の魂のちりをはらつて、全く淨化させてしまふ。花の薫りのとけこんだ月光が、佇む人の全身にふりそゝげば、その冷たい、馨ばしい光りは心の臓まで深くしみこんで行く。あゝこのときの心持ち、何の言葉をもつて形容すべきか。

人間はひとたびは死ぬる運命をもつて生れて來たものだ。どうせ死ぬなら、願くばこんな月夜の晩に、親しい人々に看護されながら、おもむろに瞑目したら、どんなに本懐だらう。さぞ死んでからも、綺麗な國土に生れることだらう。

同じくは
花の下にて
我死なん

そのききらぎの
望月の頃

との一首をのこして、建久九年の二月十五日（陰暦）とやらの望月の夜に、息を引きとつた西行法師は、どんなに本懐だつたらうか。

さて次ぎにはいよ〳〵一年中の月夜のそのうちでも、最も妖艶、美麗をきはめた朧夜の月に身も魂もうちこんで、力のかぎり讃美したいと思ふ。

照りもせず
くもりもはてぬ
春の夜の
おぼろ月夜に
しくものぞなき

これは大江の千里が、白樂天の不〻明不〻闇朦朧月。不〻暖不〻寒慢々風といふ

句の意義をとつたといふことだが、吾人は今この歌の趣旨にどこまでも共鳴して、この生あたゝかい朧夜を味はうとするのだ。

しづかな鄙の夜はふけて、ともしびの下にひとり數學書をひもときつゝある折しも、やつぱり春の夜だけある、室に漂ふ零圍氣にいひしれぬ唆るやうな匂ひと、とろけるやうな軟か味とが、こまかく交ざつて、その解釋のむつかしさに行き惱む我が魂に、びた〳〵とあまい囁きをよせる。やがて自分は何物かにひき出されるやうに、雨戸をそつとあけて戸外に下り立つた。

たつたひとり、ほんとにたつたひとり、自分はぶらりぶらりと、そこらに歡樂のかけらでも落ちてゐないかと村里の小路に下駄をひきづつた。だれでもが唯で占有のできる空間のある一定容積を雨戸や壁で區切りとつた百姓の　屋といふ狹い箱のなかでは、今しどんなことが進行しつゝあるだらうかと考へた。

定めし煤けたランプの火影はものうく室をてらし、眠つた女房の白い乳房に、眼ざめた嬰兒の赤い唇が吸着して、そのかはいらしい咽喉をごく〳〵とあたゝかい乳汁のとほる小さい音がしてゐるだらう。その傍の床には枕をはづし、ねまきをはだけた娘のからだから、むれて流れる生き肉の肌の匂ひが、ほのかに室内に漂うてゐるやうに思はれる。

庭につんだ米俵の上では髭のながい五六疋の鼠がダンスまがひのあそびをして無遠慮にはいまはる。裏口へ出て見ると、井戸の釣瓶がひからひてがつ〴〵と風にふるへ、井桁には銀色の蛞蝓(なめくじ)がゆるやかにねばつてゐる。

それから路の方へ眼を轉ずると、敏捷ないたちが、何かゐたら飛びついてやらうと、つゝゝゝと小刻ざみ走りあるいてゐる。

人家のあるところから、ひろ〳〵した野の方へまよひ出て見ると、ぬるんだ水

のじく〳〵と泌み渡つてゐる田圃の中では頓狂な蛙等が、頬をふくらせて月に吠えてゐるのもあれば、泥水のどろ〳〵した上をスケートしてゐるのもある。又少々度胸のある奴は、いきなりおけらに飛びついて、そのふとつた尻を食ひかいた。田圃のわきを流れるせゝらきでは、いやらしい蛭がS字形にくねつたり、くろい鰌が底をぬめつたりして、草の根をゆるがす流れにあそぶ。

ときどきすうつと、羽音もさせず空をとび行く黒い怪物は何物ぞ。

折しも空にはまどかな月が幻のごとくかゝて、半分居眠つたやうに下界をてらしてゐる。又その空はうすく煙つて、銀の火山灰が一面に立ちまよひ、遠くの景色ほど、餘計にぼかされてゐる。摺りガラスに抑へられた電燈のやうに、明るいでもなく、暗いでもなく、ほんとにじれつたい月の光りだ。うろ〳〵と野路をあるき廻れば、青草の中に交る花も露をいとうてか、皆花びらをまいて

安らかに眠り、晝間この花にたわむれた蝶々は、今いづくのやどの假寢に夢をむすんでゐるやら。

よどんだ暖かい夜の空氣を押しわけ押しわけて、あるきまはり、だん〳〵に櫻の林へと近づいていつた。晝間はさぞや浮かれた男、女どもの酔うて、うたうて、のたうつたらしい名殘りの、ほのかに見える櫻の幹の間を縫うて、ふらふらとうろつきあるいた。すこし峠をすぎたかと思はれる梢々には山のごとく、花瓣がもり上つて、そのにほひに咽せかへるやうだ。この枝のやつとすいてゐる個所から、空を透かして見上げると、お月さまは薄絹の霞のヴェールをかぶつて、うらららうつらとまどろんでゐる。そして口からだらりと垂れた涎れが天から下つて自分の頭にべとりとついた。これはきたないと自分は早速、頭をつるりとなでて手首を強く一振りふつた。きよとんと花の下に立ち止まつて手

を拱ぬけば、空にも地にもゆら〳〵と流れて戻るそよかせの餘りに肌のなまぬるさにおぼえずうつとりとして、身體のかたむくにびつくりして我れに返つた。

又もおそひかゝる睡魔とたゝかひつゝ聞かうともしないが、耳にひゞくのは、あたりがいよ〳〵靜まりかへつて、しん〳〵と更けゆく夜の脈波となつて、ひろがりひゞく音だ。ぽたりぽたりと月光の雫が、雲のあひだから滴下する微音に交つて、ぽぞ〳〵とさゝやく聲は、櫻の花がたがひに睦んでゐるのだらうか。おや〳〵おかしいぞ。この眞夜中に、すぐ向ふの花の中から、大勢の笑らひさゞめく聲が、ひくゝ地をはうてひゞくやうである。いや〳〵耳の幻覺だらう。さうではない。實際どよめくこゑが物すごく耳の底にしみ入るやうだ。

自分はふと幼いころ、死んだ婆さんから寢物語りにきいた瘤とり爺の一件を思ひ出した。片頬にみにくい瘤を生らしたひとりの爺さんが、夕まぐれに木の

朽ち穴に、蚊をぴしやぴしや叩きながら、雨の晴れるのを待つてゐたら、どこからともなく、何ともかとも言ひやうのない異形の化物どもが、爺さんのゐるとも知らず、大勢朽ち穴のまへに、ぽかりぽかりと現はれて、さん〳〵醉ひくらつて、踊り狂うたさうであるが、ひよつとすると、そんな妖怪や青鬼の手合が、人も花もうまいせるこの眞夜中に、さすが變態心理のかれらも、花の香にゑひ、月の光りうかれ出して、月見花見の酒宴としやれてゐるのではなからうか、それでは一つ御面相を拜見してやらうと、おそるおそるおの〻く足を一歩々々ふみじめつゝ、音もなくすりよつていつた。

案にたがはず、今や酒宴の最中だ。あつまる面々はそも誰人ぞと、月のひかりにすかして、ためつすがめつ見れば、物すごいほど、あを白い頸すぢに、水にぬれたやうな黒髪がかぶさり、なほその先がなよ〻かに、背中になびいてゐ

る。かるやかな蟬のはねのやうな白の裳をひるがへしつゝ、大勢の仲間のうちの十人ばかりは、圓陣をつくつて、白蟻のやうな手足をふり動かしつゝ日のくらむやうなダンスをやつてゐるが、皆足さきが、地からはなれごほしでないかと思はれるほど、身輕るさをきはめてゐる。

自分は一目これを見てはつと驚いた。いよ〳〵出たなと、からだがぞつとしたかと思ふと、一ふるひ、ぶるぶるつと無意識に身振ひした。

ところが、いぶかしいことには、飲んでゐるのも、踊つてゐるのも、惜しいかな、みんな向ふむきだ。どうかして、一人でもよいが顔を見せてはくれまいかと、木の幹にわが姿をかくすやうにして、じり〳〵とつめていつた。が待てしばし、これはちよつと考へ物だぞ。もしや、その顔をのぞいたときに、天女のやうなあでやかなものであつたら、まことにその甲斐もあるが、さうでなく

で、あの（おじり）がつり上り、口が耳元までさけた、人喰ひの鬼女たちの一團でゞもあつたら、それこそそれこそと、よいところに早く氣がついたものだから、いきなりはいてゐた下駄を手に持つがはやいか、ばた〳〵と旋風をまきおこしてわが家におびえこんだ。

あまりの恐ろしさに、はつと飛び起きたら、くらい閨の雨戸のすきまから、青い月の光のさしこんでゐる春の夜の、夜半すぎての夢にうなされたのだつた。どき〳〵と胸の高鳴りがやまないから、雨戸をあけて、夜風に顏をさらした。山も野も畑も、いちめんに闇の白粉下にすきまなく塗られたその上を、朧の月の光が白粉のやうに、うすく手際（てぎは）に刷（は）かれてゐた。

夏の月　花の上を夜な〳〵てらした月も、四月、五月と花の季節もはかなく逝きて、やがては新緑の萠える初夏の六月に入る。春からこの夏へかけて

は、殊の外雨もゆたかにふり注ぎ、しめつた田植歌に、憂鬱な頭腦をわづかになぐさめるばかりだ。折角の月夜も、雨雲（あまぐも）に妨げられて、地上にはわづかに仄かな明るみを見るのみだ。さみだれ頃の人の心ほど、行きつまつて、いら〳〵するものは又とない。

しかしながら、それでも偶には夜の空の雲がさけて、唯束の間の月光が、さやかに輝き出し、草も木も、屋根も、びつしより雨にうるほつて、重くるしい樣子をしめす、その上にうつくしく光ることもある。

さみだれや
ある夜ひそかに
松の月。

夜ふと雨戸をあけて、外をながめ渡したら、思ひがけなく、庭の松の上に、

長の降雨できれいに洗ひ出されたお月さまの顔が、さわやかにてつてゐた。その景色をとらへたところは、凡ならざる手腕である。

葉櫻の山にしげる頃、暖かい南國からはる〳〵訪れた杜鵑（ほとゝぎす）は、初夏の夜の空に、しきりに絹を裂く。わざ〳〵その音をきくために都から山里にのぼりこむ風流人も昔はあつたさうな。他の鳥の巣に自分の卵を産みつけ、生れた仔雛は、もとからそこに孵（か）へつた雛を巣の外につき出して、自分ひとり、他人の親に哺育されるといふ實にひどい鳥だ。ひどい鳥ではあるが、昔から歌にもうたはれ、風雅をこのむ人の推賞おかざるところとなつてゐる。又この鳥はほかの鳥の食ふことのできないあのいやな害蟲のけむしなどを、何の躊躇もなく、むさぼるので、農林上に大へん利益があるとのことなれば、雛時代の横暴も人にゆるされて、今は保護鳥にかぞへられ、夏の期間は大びら、月夜の大空を滑走してゐ

る。

ひとこゑは
月がないたか
ほとゝぎす。

有明の月に、するどい一聲をなげつけて、忽ちはるかかなたに姿をかきけす杜鵑は何といふ歯切れのよい鳥だらう。

夏もさなかとなれば、どうせ早くから雨戸をしめて寢られるものではない。柳の葉のそよぐ河べりに出て、流れにうつる月かげを賞するのも亦一興だ。

とかく夏の月は水を添へないことには涼しくはおもはれない。

秋の月　かくて暑い夏もいつしか、すぎてはや野に秋風の吹きわたるころとなれば、空はます〳〵澄み切つて、星の光りも一層その濃さをまして來る。

石の下や、草の間にすだく、蟲の音に、胸のいたみをしきりに若人感ずる、の心ほどあはれにも、氣高いものはない。

未だそれでも殘んの暑ささりやらず、林の木の葉も尙靑く末の茂りをのこしてゐる頃、陰曆の八月十五夜がめぐつて來る。仲秋の名月ともいひ、一年中での滿月の中、古來もつとも人口に膾炙されてゐるものである。そのみなもとは支那から起つたもので、我が國では大昔からこれを又なき高興となし、宴を設け、詩歌を賦することがだん〳〵さかんとなり、後の世までも、この風習は衰へずに傳はつた。そして民間では芋や團子をこの夜の月に供へ、又隣家や知己にやりとりするを例としてゐる。

木の間より
もりくる月の

かげみれば
心づくしの
秋はきにけり。

その冴えは、げに一年の中で最もいちじるしく、人々の心をひき、豐富な詩歌の材料を供することも最も多いのである。

靑々した稻田に夜風の波うたせて過ぎ行き、空には雲の片影だになきとき、研ぎすました滿月が高らかに冴えかゞやくを見上げるのは言ふに言へない神々しさを感ずるものである。遠い山々までも、月光にてらし出されてほのかにその寢姿をあらはし、とき〳〵水禽の羽音せはしく飛びゆく有樣は、あゝこの煩はしい人間のすむ穢土にも、たとひ一時的にもせよ、こんな輝やかな世界が出現するかと、ほんとに身の生き甲斐あることを喜ぶに至る。

空からは一面に銀の簾がさがつて、折から吹きわたる涼風にさら〳〵ゆれる。畑に一面うゑつけられた棉には白い穂かゆたかにふいて、遠くからのぞめば、雪でもふつたかと思はれる。

名月の
花かと見えて
棉畠。

げに天上の月から種子が下りて、この畠に芽が出て、さいたかと思はれる、この棉の穂は、見るからに、すがすがしい氣分をあたへる。

九月十三夜に月を賞することは唐土から傳はつたのでなく、本邦獨特の風習であるさうな。八月十五夜は芋名月といはれてゐるが、九月十三夜は莢豆をうでて、月にそなへるので豆名月といはれてゐる。

この兩夜にかぎらず、いつでも秋の空に冴える月は美しさの極はみであるが、その上、故事を聯想してながめ賞すると、また一しほの趣きをそへるものである。

冬の月　秋から冬へかけて滿月は次第に空の高いところを歩むやうになり、十二月から翌年の二月までの冬の期には、滿月蕭條の荒野の上に高くかゞやく月を見るときは、身も心も凍つてしまふと思はれるばかり、一層の寒冷をおぼえる。その寒さにもめげず、ひとり夜外に逍遙すれば、月の光りは寒氣に加勢して、枯草といはず、枯木といはず、何もかもを、きゆつと締めつけて、その上に霜で砂糖引きをつくり、又溜まり水のうはつらを天井張りし、軟かい土の上に霜柱を建設する。

寒がりの人間どもが、朝白い息きを吹き出しながら、戸のそとに立ちいで、

えらい霜だなあ！

そのころはお月さまは、とつくに山のむかふがはに、おさらばを極めこんでゐる。

以上四季さま〳〵の月夜を昔風の觀賞の仕方で述べたて〻見たが、その在來の趣味でよいと滿足する人はそれでよしとして、もつと近代の文明人にふさはしい見方はないものかと不滿がる人々のため、自分が體驗した月夜のあたらしい趣きを矢ぎにならべて見る。

月夜の新たらしい觀賞

それは未だ初春のわりあひに容い夜だつた。夕ぐれに風をいとうてすぐ、戸をしめ切つたから、今夜がどんな景色であるかは、てんで頭になかつた。かなり夜がふけてから、明るい電燈のへやから、暗い便所へと用足しに行つたところ、意外にも眞暗らであるべき便所

の障子が青く一面に光つてゐるではないか。その上、障子の外側の格子の影が、それはそれは、はつきりと障子の紙に市松模樣をこしらへてゐた。青い地に、うすぐろい市松模樣はいまだ、わが眼底の網膜にはつきりした印象をのこしてゐる。

かつて過ぎし昔、京都の北方の村落、いはゆる洛北に假寓して日日、京都の市街へかよつて居たころ、どうせ商賣柄、よるおそくなるのは珍らしくなかつた。ある冬のごく澄み切つた午前の二時ごろ、やつと望遠鏡のぞきを終へて、色の褪せたマントに身をつゝみ、消えかゝつた提灯を自轉車の把手（ハンドル）につけ、市街から加茂川の松並木の堤防をひたばりしに走つた。ふと東山の方をみたら下弦過ぎの痩せて、赤味がかつた月が、寢とぼけたやうな顏して、せり上つて來るのに氣がついた。幸ひ夜路をてらしてくれるから結構だと思ひながら、一刻

も早く頭ならべて、小さい息づかいしてゐる、いとし兒らの顏を見なければならぬと、いよ／＼走れば賴もしいぢやないか。月も亦、東山の峯々をとびこえて北に進み、自分と同じやうな速さでついて來てくれた。

氣がついて自分の西の方を見ると、細長い自分の影が、水面を蜘蛛がつゝつゝと走るやうに地上を止めどなく、すべつていく影が何だかおかしくなり、ぷつと噴き出した。いくら笑　ても、無論こんな時刻に人の見てをらうはずはない。とかく夜の商賣人は別に深夜であらうと、夜明けであらうと、こはいとも、さびしいとも何の感じも起らない。たゞ夜といふものは靜かで、氣がおちつくわい位にしか思はない。

右とつゞきの話だ。洛北のわびずまひは、あまり家賃を奮發しなかつたから二階も下も雨戸とて唯の一枚もなく、四季、晝夜を通じて唯すゝけた障子が辛

うじて夜風をふせぐのみだつた。寒い冬の夜、階上に寢てゐたところ、障子にはめられたガラスを漉して明るい光がさし込んで來たので、これは月夜だと氣がつき電燈を消したら、外の光りは、一層ぱつと、そのあかるさを增した。寢ながら、炬燵にあたりながら、月見が出來るとは中々贅澤だとわらひながら、飽くほど月光に親しんだ。

これは別のところの話だが、生溫るいある年の春の夜、室內で寢てゐたらあまり屋根の上が騷々しいので、何事がおこつたかと、わざ／＼物好きにも外に出たら、大きいお月樣が、花がひらいたやうに、霞の空に照らしてゐた。そして屋根には、さかりどきの牡と牝との猫が相對して、身をふるはすやうにしてゐた。はゝあ、猫は外で、こんなよい月の光をあびつゝ、執行するのかなあと思つた。

さるところで夜、天文の講演を催したとせよ。そしてそのあとで、準備した望遠鏡で聽衆が一人々々のぞく手筈となつてゐた。ところが生憎、それは滿月の夜で空があんまり、明るすぎて一つも重要な星が見えなかつた。なぜこんな不便な晩をえらんだのかと、主催者にきいたら、明るい晩の方がよからうと思つてと答へた。

陰曆四日ほどの月が西南の空にほのめく、まだくれてまもない京都の市街の側に、その月めがけて、スケッチに餘念のない一人の美術學生を見かけたことがあつた。あゝしてスケッチすれば、月の恰好や傾き方の理屈を知らなくても大丈夫、本物がかけるとたのもしく思つた。

一時狩獵にふけつてゐるころ、家から少しはなれた川に夜な々々、水禽の下り立つことを聞き、いつたいどの邊か、とくと樣子をみとゞけようと、ごく氣

のあつた友と二人づれ、冬の滿月の隈もなく照らしてゐる夜、興にまかせ寒さをも忘れて川べりに出た。なるほど聞きしにたがはず、いろ〳〵な鴨の類が、どこからとなく幾十羽も飛び來つて、ざぶ〳〵と水面に落下する。好いかげん飽いた時分には、ばた〳〵と水面を蹴つて、空にまひ上る。げに勇敢な鳥だと思つた。この寒中に冷水にひたつたり、凍つた風を突破して空をかけたり、身を甲冑でゞも固めてゐなければ出來さうもなく思はれた。

ゐころがこゝに、案外だつたのは昔から、白雲に、はねうちかはしとぶ雁のかずさへ見ゆる秋の夜の月といふ歌が喧傳されてゐるので、全く月夜の鳥は數まで讀めることだと思つてゐたが、いくら月が明るくても、空飛ぶ鳥はたゞ羽音でそのありかを知るのみで、あんまり數はわからなかつた。

おもふにこの古歌は家の中で、火鉢に手をかざしながら、寒月の冷たくてら

す夜に、そとはかうもあらうかと、想像を逞うして詠じたのではなからうか。

ある夜のこと、東京の名にし負ふ銀座通りをあるいてゐたら、長らく工事中だつた京橋が、いつのまにか竣工してゐて、その尨大な構造が自分の眼の前に壓するごとく、あらはれた。ふとその欄干に目をつけたら、青いぬれたやうなガラスを通して、軟かく輝く電燈が數箇とりつけられてあつた。その光りは實にこの世のものとも思はれない、どこか天女か何かの住む國の燈火のたねを、うつしたのではないかと疑はれた。

それから日數を經て、又晴れた夜にこの橋をとほりかゝつたら、自分の好きな欄干の電燈はやはり、騒々しい巷の塵の中にひとりあの世の光りに仄めいてゐる。前の夜は闇夜であつたが、今夜は拭つたやうな空に、上弦の片割れ月が小頸かたげて、下界をみつめてゐる。さてあの月と、この電燈と、どちらが美

しいかとよく〳〵見くらべたら、いくらきれいでも、塵の世にうごめく人間のよごれた手で造つた電燈の光りは、あの高いみ空に冴える月にどうしてどうして、及びもつかないことが瞬間に直觀された。

自分は人間の技巧の、とても自然に及ばないことをつく〴〵思つた。

第五章　月夜を舞臺とした傳說

かぐや姫の昇天

月夜をあこがれ、讃美してゐれば、やはりこの月光の下に、古人はどんな風流事を敢へてしたかと思ひ出さゞるを得ない、そこで本邦において、月夜の舞臺に演ぜられたかず〳〵劇のあらましを書きならべて見る。勿論世間周知のことがらのみで、あまり讀者をして新らしい興味をひきおこさせようとは豫期してゐないが……。

ずつと大昔、竹取の翁といふのがあつて、毎日山へはいつては甲斐々々しく竹を切り出し、貧づしい生活をつゞけてゐた。多くの立てる竹の中に一本だけ異様に光るのがあつたから、怪しがつてそばへより、竹の中をみたら、身のたけ三寸ばかりの、それはそれは美しい女の子がゐたので、かはい〳〵子だと頬ずりして掌にのせて家にかへつた。

そしてそれからは朝夕、妻の嫗とともに、いたはり愛した。ところが不思議なことには、それからといふものは山へ入るたんびに、黄金のはいてゐる竹をさがしあてるやうになり、忽ち裕福になつてしまつた。

日増しにのび行く子は、美しきこと限りなく、名を秋田なよたけのかぐや姫とつけた。聞きつたへて、をちこちの若い男どもが言ひよつたが、かぐや姫は見向きもせず、まことに詮すべなく見えたが、よりあつまる多くの若人の中で

命すて〳〵もと、思ひこんだ五人の貴族があつた。石作皇子、車持皇子、右大臣阿倍御主人、大納言大伴御行、中納言石上麻呂とて、いづれその當時はとぶ鳥もおとすきけものばかりであつた。

これらの門閥とか權力とかにも、いさ〳〵か心をうごかされなかつたかぐや姫の態度はまことに雄々しいものと思はれた。地位とか名聲のために眩惑されず、男に身をまかせないといふ、この儼たる心意氣は末の世までのよい手本だと思ふ。

だん〳〵年をへるに從ひ、かぐや姫も大きくなり、いづれよい聟をとらねばならぬので、翁のおもへらく、この五人の人々はわが家にとつても、一人として不足なく、勿體ないくらゐだ。さういつまでも强情をはらずに、五人のうちの誰れか一人を選びたまへと、嘆願に及んだから、かぐや姫、ちよつと當惑の

色で眉をひそめたが、しばらくあつて、それぢや、その中のどなたか一人を夫と定めたいが、さていよ〳〵となると、同じやうな人ばかりで、何を標準としてよいやら、わからないから、たゞこちらで一つ宛、注文を出し、見事これに應じてくれた人にまみえませうと言ひ出した。翁もそれもさうだと同意した。

そこで石作皇子は天竺へいつて佛の御石の鉢、車持皇子は東の海の蓬萊山にのぼつて白銀の根、黄金の莖、白玉の實の木があるから、その枝を一本、阿倍右大臣は唐土へ行つて火鼠の裘、大伴大納言は龍の首にある五色の玉、石上中納言は燕のもつてゐる子安貝、と皆夫れ〴〵問題が提出された。

五人の面々、行くに行かれず、探がすに探されず、さればとて思ひあきらめもできず、泣く〳〵おのが家を出て、そこらへ彷徨ひあるいた。

石作皇子はちよつと小才子であつたが、とても天竺まではいけまいと、あき

らめ大和國のさる山寺の賓頭盧尊者の前にあつた煤けた鉢をゆづりうけ、錦の袋におさめて、いかにも大事さうに、持ちかへつたが、忽ちかぐや姫に看破られ、今はこれまでと鉢を庭にうち棄てゝにげかへつた。それからすてばちと云ふ言葉ができたかどうだか。

車持皇子も中々たばかりの上手な人で、人には蓬萊山へわたると云ひふらしひそかに家に閉ぢこもつて職工をあつめ、いと巧みな木の枝をつくり上げた。そしていかにも遠い旅から戻つたふりして、喘ぎながら、翁の家にやつて來た。この枝、目もくらむばかりに麗はしく出來上つてゐるので、姫も今度はこちらの負けかと、つく〴〵當惑した。翁もまことに思ひ、はや〳〵この君に從ひ奉れとすゝめた。

ところが皇子が少しも職工どもに賃銀を拂はなかつたので、職工等大に怒り

出し、皇子のあとを追うて、翁の家にきたり、日々に請求したから遂に折角のたくらみもばれてしまつた。

阿倍の右大臣は中々の財産家であつたから、どこぞにわが求める火鼠の裘（かはごろも）があつたら、金はおしまぬものをと、人を出して、あちこち探し求められたところ、幸ひ唐土の船が來航して、これを一つもたらしたよしをきゝこみ、五十兩も何のそのと直ちに買入れて、よろこび勇んで翁の家にもつて行つた。これは珍らしいものと翁も嫗を目をみはつた。かぐや姫いふやう、火鼠の裘は火にあつても燃えぬものと聞いたからとて、火鉢にぼいとほり込んだら、たちまちめら〳〵と煙をのこして燒盡した。右大臣の顏は草の葉のやうな色にかはつた。

大伴の大納言はどうせ龍は海に住むものと、自ら、いやがる船人をむりやりにつれて、浦を船出してはるかの海に數日間漂ひ、やがて筑紫の方まで漕いで

いつたころ、忽ち黑雲が卷きおこり、疾風、船をもてあそんで、おまけに雷が耳を聾するほどとゞろいたから、大納言も船人も船の中で、へと〳〵にくたばつた。龍は常に海の上の黑雲の中に住み、雷のたぐひかも知れない。こんなおそろしい物に近づいたらかけがへのない命をもとられるだらうとおぢけ立ち、這ふ々々の體で逃げもどつた。

石上の中納言は、どうかして燕の子安貝を得ようとて、よその家の巢にのぼつて、目的物をつかんだと思ふとき、忽ち地上におちていたく腰骨を打つた。それでも握つたものは離なさなかつたが、それは燕の古糞で、散々の不首尾におはつた。

時の帝（みかど）がこの由を傳へきゝたまひ、自分もどうかしてその女を見たいものだと女官をつかはせられたが、かぐや姫、いつかな會はず、止むことを得で、帝

は狩りにかこつけて、翁の家にいたりたまふに、顔をおほひて見せず、今はこれまでと手を取つて強ひて、引き立てたまへば、ぼかりと姿を消してしまつた。

帝は悶々の情に堪へたまはず、時々歌などを送つて、やつと味氣なき日をおくられた。かうして三年ばかりあつて、春の初めから。月がおもしろく出たのを見て、いつもより、かぐや姫は憂はしげな容子がほの見えた。それから日數がかさなるにつれ、一層ふさぎこみ、七月のもちの月のころは、何とも手のつけやうのないほど病が嵩じて來たので、翁や嫗を月を見たまふなと止めるに至つた。

八月の十五日にいたり、いよ〳〵恐るべきカタストロフィーに到達した。

あはれなかぐや姫はこの月を見て、からだに波うたせ人目もはぢず泣きくづほれた。親たちは心配して何事ぞとさわぎ出した。かぐや姫「もつとはやく申

さうと思つたが、親たちのなげきを思つて、實は今までかくしてゐましたが、實はわたしはこの國の人種ではなく、月の都の人なのです。緣あつて折角この國に生れましたが、こよひいよ〳〵月の使者に迎はれて、この國をおいとませねばなりません。年月すみなれた地をはなれるのが、いかにも堪へがたくて、それでこの春から嘆いてゐたのです。」

年寄りども聞いて仰天し、「いや〳〵、そんな筈ぢやなかつた。小さいうちから手しほにかけて、はぐ〳〵んだ可愛いこの娘を、ひとに渡してなるものか」とひしとわが子を抱きよせて、死んでもはなれはせぬと言ひ出した。

かぐや姫「わたしとても月の都にほんとうの父母が待つてゐます。さればとてこの國にも未練がのこり……」とて親子三人、互にからみ合つて涙も涸れよとなきなしんだ。帝はこの由をきかせたまうて、そは一大事、奪はれてなるも

のかと二千人からの兵士を翁の家にさし向けられて、その夜の護衛とせられた。やがてまどかな月の高くさし上つた頃、迎への天人どもが雲にのつて、翁の家の上までやつて來た。兵士ども弓に矢をつがへて、射ておとさうとすれども、手がしびれて射ることもならず、たゞぼんやり傍觀してゐるより仕方がなかつた。かぐや姫「せめて御兩親の死なれるまで、おそばに侍つて、こんなお歎きをかけようとも思はなかつたに……」とさめ〴〵と泣く。「せめて脱ぎおく衣なりとも、かたみとして、月のあかるい夜があつたら、このわたしを思ひ出して給へ」と、懇ろにいたはつた。

「はやくはやく」と使者どもにせき立てられて、かぐや姫、うしろ髪ひかれる思ひして、高く昇天し去つた。翁と嫗は、あとに殘り、血の涙をながして、よゞとむせび入つた。

帝もこのときの有樣をおきゝになり、物もきこしめさず、當座はお遊びにも出られなかつた。

嗚呼その後、星霜ふりて千幾百載、自分は毎年八月十五夜のもちの月を仰ぐごとに、かぐや姫昇天の悲劇の一齣を想ひおこして、ひとりうらぶれる。

月に冴える琴の音

奏の前を失はせ給うてのちの高倉天皇は、殊のほか惱ましげなお顔が日日つゞいたので、小督の局とて、禁中一の美人を中宮の御方からさし上げられた。この局は無雙の琴の名手であつた。

ところが、前から冷泉の大納言隆房とちぎつてゐたのであつたが、天皇に侍べるやうになつてから、ふつとたよりを絶つてしまつた。隆房は悶々の情やる方なく、朝夕苦しみつゞけてゐた。清盛がこれをきいて、天皇といひ、隆房といひ、ともに自分の聟にあたる。一人の女に二人まで聟をとられてなるものか

と、何やらたくらみかけた。局これを傳へきいて、あなおそろしやとて、夜に内裡を紛れ出てゆくゑをくらました。主上はこれをきこし召して、御涙に沈まさられた。

ところが頃は八月十日あまり、さしも隅もなく照り榮えてゐる空なれども、主上は御涙に曇らせて、月もおぼろに御覽になつた。夜はふけて伺候するものは一人もなかつた。誰かゐないかと御よびになつたら、都合よく彈正の大弼仲國がとのゐに起きてゐたから、早速御前へまかり出たら、「汝もし小督の局の行方を知らないか」と仰せになつたが、「いかで存じてゐませうや」と御いらへ申した。「まことや、小督は、嵯峨のあたりの、片折戸した家にあるとか。家の主の名を知らずとも、たづね出して來るやう」と仰せになつたが、家主の名がわからないのには仲國もほと〳〵困つた。しかし御涙せきあへさせず、い

かにもおいたはしい次第と、御同情申し上げた。局は琴がうまいから、この月夜に君の御事など思ひだして、きつと琴をひきすましてゐるだらう。して見れば琴の音をたづつたら見つかるだらうと氣付き、御書をたまはり、御料の馬を拜借し、明月に鞭を揚げ、西の方へとかけていつた。

小鹿なくこの山里と詠じたいやうな、嵯峨のあたりの秋の頃は、いひしれない哀れを催さしめた。片折戸した家はどこぞと家々をたづね探したが、琴の音のひゞく所はなかつた、これは困つた。このまゝすご〳〵戻つては何とも主上に申し譯もなし、さればとて、このまゝ逃げおほせるものでもなし、はてどうしようかと案じわづらつた。

法輪寺は路もちかく、こよひの月にさそはれて、もしや參つてゐられることもないかと、馬の頸をむけた。亀山のあたりの近く、松の木の立つてゐる方に、

月光に交つてきれ〴〵に琴の音がさゝやいてゐる。しかし峰の嵐か松の風か、耳のせゐではないかと駒をいそがせたら、案のごとく琴の音する家があつた。まがふ方なもない小督の局の爪音で、樂は何かと耳をすませば想夫憐の一曲である。仲國さればこそ君の御事をおもひでて、樂の種類のあまたにある中で、特にこれを彈きたまふことのやさしさよと涙をもよほした。

ほと〳〵と門を叩けば、中からはしためが出て來たが、ことわるのを强ひて中に入り、仲國「どうして、こんな所においでになるのか、君はそのため思ひ沈ませられて、御命も危いほどだのに……」と、君からの御書をとり出した。はしためは取りついで、小督の返書をさし出したが、直におあひ申さでは返らぬと頑張つて動かないから、小督も尤もと思つて對顏した。「清盛入道のあまり恐ろしいたくらみをするのを聞いて、ある夜竊かに内裏をまぎれ出て、こんな

所へ來ましたが、めつたに琴をひくやうなこともないのに、明日から大原の奥へ思ひ立つたので、あるじの女房がわかれを惜しみ、夜ふけて立ち聞く人もなからうから、是非にと所望するまゝに、ひき出して、かくあなたに聞き出されたのでございます」とて涙せきあへず、仲國もそゞろに目をしばたゝいた。「明日から大原へとおつしやるのは、定めし尼にならうとの御つもりでせう。君の御事を思はれたら、決して決してさやうなことは思ひ止らせ給へ」と堅く〳〵いひふくめて、夜あけ近く立ち戻つた。主上はまだ夕のところに御就寢にもならず、物思ひにあかされてゐた。

かくて小督は再び内裏へかへつたが、なるべく人目を避けてゐたものゝ、やがて清盛入道にかぎ出され、とう〳〵頭を丸められてしまつた。年二十三、濃き墨染の衣にやつれはて、嵯峨の奥にとすましくらした。主上はかやうの御い

たはしいことどもに御惱みつかせられて、やがて崩御になつてしまつた。

月夜の嵯峨の悲劇

これも亦、同じく嵯峨の野に演ぜられた月夜の悲劇である。平家の時めけるころ、一夕都は西八條の邸宅に一門の人々の集つた花見の宴が催された。花やかな舞や、管絃のすんで最後の舞ひに出たのは目ざましく美しい年のころ十六七の一少女で、建禮門院の曹司横笛であつた。この夜、この少女のために胸に深い痛みを覺えた若人らの多かる中に、わけても深く思ひをこがしたのは齋藤瀧口時頼とて、性來の無骨者だつた。

かうした無骨者の一旦人を戀ふやうになつたら、それこそ眞劍になるもので、今まで書きなれない戀ひ文を、いくたびか女に寄せたが、あはれや唯の一度も返書の來たことはなかつた。實は他にも時頼同樣に思ひこんだものがあつたので、横笛はどちらへ承諾をあたへてよいかと、日夜苦しみつゞけた。

思ひあまつて、父にどうかあの横笛に婚姻の申しこみをして下さいと、恥かしさをも忘れて歎願したら、父は相當名の知れた人の娘を貰はうと思つてゐたのに自分勝手に、よしなき者を思ひそめて……と、ひどく叱りつけられた。

けれども時頼はわづかの一生の間に心を染まない女と、どうして義理にも同棲のできるものではない。さればとて、強ひて繼しい女に添はうとすれば父にたいして不孝を重ねることゝなる。しかず世をのがけて、み佛に仕へまつらうとて十九の年落飾し、嵯峨の往生院にかくれ、あつぱれ新發意となつて行ひすましてゐた。

横笛はその由、傳へ聞いて、あゝ自分の不決斷が、あたら一人の武士を廢らしたのかと、身をふるはして歎き悶えたが、もう事件はすぎ去つたので、いかんとも詮方なく、せめてあつて御詫びでもしようと　二月十日すぎの夕方に嵯

峨の方へ出發した。平家物語はこのあたりを書いて、文の妙を極めてゐる。

黄昏がたに都を出でて、嵯峨の方へぞあくがれける。比は二月十日餘のことなれば、梅津の里の春風に、よその匂もなつかしく、大井川の月影も、霞にこめて夜なり。一方ならぬあはれさも、誰故とこそ思ひけめ。往生院とは聞きつれども、さだかにいづれの坊とも知らざれば、こゝにやすらひかしこに彳み尋ねかぬるぞむぎんなる。

すみ荒された寺に念佛の音がしたので、それこそ尋ね人と、具した女に案内をこはせた。時頼は障子の破れからそつと覗いたら、裾は露に、袖は涙にぬれて、いさゝか面やつれした顔ばせ、ほんとに尋ねあぐんで來たらしい風情、いかな道心堅固な修業者も、心がひるむだらうと思はれたが、遂に心強くも會はずに追ひかへしてしまつた。

又たづねられては佛道のさまたげと、嵯峨を出て、高野山へかくれてしまつた。

その後、横笛は落膽のあまり黒い髪を切りおとし、奈良のさる寺へ入つて佛のみまへに、額づく身の上となつたが、なほも出離の境に至りかね、遂に病を得て、はかなくなつた。

およそ古來の月光下に行はれた、かず〳〵の事件のうち、この横笛の月夜のさすらひほどあはれのかぎりをつくしたものは又となからう。

すげなく面會を謝絶され、胸もさけるかと思はれるのを、しひてこらへ、熱い涙が瀧津瀬と下るをおさへながら、さびしい月の入りかゝつた夜半の野路をとぼ〳〵とるごり行くに至つては、悲慘の極、自分はいつもこの章に讀みいたる毎に、思はず卷を伏せて哀傷の胸にこみ上げるのをとゞめ得ないのである。

このほか、まだ月夜の風雅、又は悲劇もかず〳〵あるが、その中比較的世に知られたものいくつかを、ごく簡單にのべておく。

天の原、ふりさけ見れば春日なる、三笠の山に出でし月かも

と、故郷をしたひわづらうて、安倍の仲麿は、とう〳〵唐土の土となつてしまつた。この詠歌のこゝろを聞いて、當時の有名な詩人王維、李白の徒までが袖を絞つたとのことである。

はるけきつくしの國に配所の月をながめやつた菅公の心の中ぞあはれとも、何んとも慰めやうもない次第であつた。九月十日の夜、月かげ隈もなく、弱り行く蟲の音を心しみ〴〵聞きたまひ、前の年の宮中での月明の夜の御遊を思ひ出し、去年今夜清涼に侍するの詩を賦して、辛じて悶々の情を自らなぐさめた。

延喜帝の御孫に博雅といふ人があつた。この人琵琶に湛能であつたが、この

ころ逢坂の關に蟬丸とよぶ盲人がすまひ、秘曲を藏してゐた。博雅はたびたび使をして、都に遷りすむやう勤められたが、盲人いつかな聞き入れず、さればとて若しこの人が死んだ後は、折角の秘曲も、世に絶えはてるだらうと博雅は憂慮に堪へなかつた。そこで、わざ〳〵自ら逢坂におもむき、その秘曲を聞きとらうとしたが、中々彈かず三年の間、毎夜その庵室の外を徘徊したが寸効もなかつた。

三年目の八月十五夜、月が少しくもり、風稍吹けるに、今宵こそはと、ひそかに期待してゐたら、案のごとく、琵琶の秘曲をかきならして、面白さうに見えた。そしてひとり、逢坂の關の嵐の烈しきに、盲いてぞ居たる世を過すとて

と詠じた。やがて琵琶をかたへにさしおき

「あゝ、何といふ面白い夜だらうか。こんな夜に心あらん友もあらば、夜も

すがら物語りせうに」

とひとりごとを言つた。乃ち博雅は踊り出で、三年間のうき苦勞のほどを述べて、歡談つきず、ことゞく秘曲を授かつてかへつた。

新羅三郎義光は、豊原時元について笙の秘奥を學んだが、時元はその子時秋猶幼少であつたから、その秘傳を授けることができないうちに死んでしまつたが、義光は幸ひにしてそれを授けられた。しかるに後三年の役に義光は兄義家に應援しようと、陸奥の國へ旅立つたが、時秋はもし義光が戰死でもしたら、その秘傳の永く滅せんことをひどく憂ひ、そのあとを追うて足柄山に至つた。義光もその心を察し、足柄山の頂きで、折しも冴えわたる月光の下に笙を吹奏し、ことゞくその秘傳を時秋にさづけた。時秋は大によろこび安心して都に返つたとの由。

百本の他人の太刀をうばひとり、天晴れ武藝のほまれを輝かさうと勇僧辨慶は、五條の橋に目を光らせて待ちかまへてゐたが、遂に牛若丸の通りかゝるを呼びとめ、互に仕合ひしたところ、もろくも小男牛若のために、組伏せられてしまつた。その時六月十九夜のお月さまが、むしあつい空の上に小頸かたげて見物してゐた。

兄の一萬が九つ、弟の箱王は七つ、九月十三夜の月かげ、さやけき庭に、あどけなく遊んでゐたところ、五羽のかりがねが列をなして南にとぶのを、ふと兄は見付けた。「あれを見給へ、箱王よ。空とぶつばささへ、他人交らずにくらすではないか。五つつれたその中で、一つは父、一つは母、殘る三つはその子らであらう。物いはぬ鳥類さへ、このやうだのに、吾等はそなたは弟で、われは兄、母上はまことの母上だが、父上のおはしまさぬこそ慨はしけれ。吾等も

父上さへおはさば、馬鞍や、弓矢を賜つて、よその子らのやうに面白く遊びあるくものを……。それにつけても父上の戀しさよ」と大人らしくさめ〴〵と涙を流せば、いたいけな弟まで、兄の心を察したか、共に抱き合うて、乳母の案じて向ひに來るまで泣きあいた。

あはれこの兄弟、後に不倶載天の仇をうち、兄は裾野の露と消え、弟は斬に處せられてしまつた。幼きときから、うら若い一生を終るまで、二人の兄弟は堪ふべからざる辛酸をつぶさに嘗め、めでたく本望をとげるや否や、草葉の露と、あへなく消え失せた。げに薄倖な人にはどうして、又こんなにそれがついて廻るのか。

大厦のくつがへるは一木のよく支へるどころではないが、散々に主家尼子氏につくした上、勇士山中鹿之助もあへなき最後をとげねばならなかつた。

この鹿之助、十六歳のとき、かぶとに三日月をつけ、且つこれを信仰した甲斐あつて、忽ち強敵の首をかきとることが出來たので、その後生涯、三日月に禮拜したとは、武きものゝふに似ず、何と云ふやさしい心根であつたらう。

能登に討ち入り、七尾の城を陷れた上杉謙信、九月十三夜酒宴を催ほして將士をねぎらつた。折からの明月に、霜は軍營に滿ち秋氣淸しの、かの名高い詩を賦した。戰國時代の武將には稀れに見る風流人であつた。

先づこれで月夜の物語りは止めておくが、尙このほか、源氏物語とか更科日記さては十六夜日記など、どの物語を見ても、大抵そのあひだに、事件が月明の夜におこることがある。まことに夜の世界に光る月かげがなかつたら、いかばかり世は蕭條たるものが料り知ることはできないと思ふ。

第六章　月は地球の分身

星雲説の大要　月と地球との昔話をするには、先づ天文學で行はれてゐる星雲説の大要をのべないとわからない。ずつと昔、と言つたところで千年、萬年とは桁がちがひ、幾億幾十、幾百億年の永遠の過去に空虛な暗い、つめたい空間にさしわたし幾億里かのガスの大塊が巨鯨のごとく、横はつてゐたとせよ。しかして永い々々時劫をへて、このガスの大塊は次第にその分子の持つてゐる引力の作用によつて、互に牽引し、遂は中心に凝集するの大勢を馴致するに至つた。そしてその容積が縮まるにつれ、内部の温度がじり〳〵と昂騰して灼熱の狀態に達し、且つその中心體は自ら廻轉するやうになつた。かうしてその廻轉は時とともに猛くなり、遂に外皮の一部はとび

出して、その中心體をはるか離れた空間を、一本立ちとなつて、ぐる〳〵流れ廻る。このやうなことが幾度もおこり、その度ごとに、外がはの物質は皆母親に暇乞ひしては、分家する。後の世に至り、中心體はだん〴〵格好がよくり、遂に球狀を呈して燦爛と無碍の光明を十方世界に遍照させるやうに仕上げた。是れ即ち現今の太陽と吾々のあがめる天體である。

先きに分家した面々は遠い所から順に言へば海王星、天王星、土星、木星、火星、地球、金星、水星と主なるものはこの八人兄弟である。これを現在、惑星と呼びなしてゐる。母家をはなれたときは、惑星は未だぼか〳〵と暖かく、且つどろ〳〵の液狀を呈して、迅速に自轉しながら、中心體のぐるりに遊行してゐたが、丁度母體から、八惑星が生れたやうに、又惑星の外面がぷつ〳〵と切れはなされて、小さい分家が出來、それが惑星の周圍にうごくこと、宛も惑

星が太陽の周圍にうごくと同じ趣きである。この又分家は衛星ととなへられ、水星、金星を除いてほかの惑星には必ず附屬してゐるもので、吾が地球には唯一つ月といふ衛星が從屬してゐるのを見る。

地球と月とは昔同體であつた

して見れば、太陽の子が地球で地球の子が月となるわけであつて、月はもと地球の體の一部にくびれが出來、そのくびれが地球の自轉のはげしさに、遂につながり得ず、思ひ切りよくぷつつと斷たれて、とび出したものである。そんな心持ちで照る夜の月を見ると一層なつかしく、いとほしくなつて來る。

その母子の別れを惜んだのは今から、どうしても一億年以上の過去でなければならない。その頃ほひの地球は勢するごく、たつた五時間ばかりで自轉し、それとすれ〳〵に月も亦五時間ぐらゐで、地球の外圍を一公轉してゐた。しか

るにあるほかの理由で、地球の自轉周期はやうやくにぶり出し、おくれおくれて今のやうに二十四時となり果て、月の公轉も亦同じくおくれにおくれて、今の二十七日三分の一と延びてしまつた。剩さへ月の自轉は今よりずつと早かつたのが、それが今ではその公轉の周期と自轉のそれとが一つになつた。

この後、地球の自轉する時間はいよ〳〵のろくなり、現今の四十九日が、將來の一自轉時間となるだらう。即ち約二十五日の長い晝と、二十五日の飽きあきする夜とが交互におこり、今の生物もさうなつたら甚だ暮らしにくゝなるだらう。そして月は地球より、次第々々に遠ざかり、その一公轉時間が矢張り四十九日となつてしまふ。即ち地球の自轉と、月の公轉とが同じ時間に到達して一と先づ變化が停滯することゝなる。

併しながら、かういふ風に現今の狀態が變化して行くとしたら

月は將來地球に落ちて來る

未だしも比較的平穩と言ふべきであるが、こんどは、地球の同じ半面が太陽に向かひ、他の半面は常夜の闇となるだらう。宛も月が地球に同一半面を向けるやうに、又現に太陽のすぐ傍の水星が、始終その同じ半面を太陽に照らされてゐるやうに……。さあさうなると、今度は逆に月がじり〳〵と止め度なく、氣味のわるい螺旋を描きつゝ、元の古巣の地球目がけて近よつて來る。

近よつて來るといへば、大層親しさうで結構であるが、急速に進行しつゝある自動車や電車が、近よつたらどんなことになるかを想像せよ。それは短かい年月ではないが次第々々に、一公轉は一公轉よりと地球に向つて近迫し、あはやと地球上の人々が手に汗を握るに至るだらう。

思へ、あのお月樣の顏が年々歲々、初め提灯ほどだつたのが、盆の大さとなり、次第に膨れて盥の周りに增し、尙も膨大して天の背景の大きい區域を占有するに至る。今の滿月は太陽の光りの六十萬分の一しか、明るくないが、かうなれば中々もつて、來る夜も來る夜も、あまり明るすぎて、天文觀測に甚だしい妨害となる。こそ〳〵と人や夜間動物のやる密事が、月光に照らし出されてはなはだ迷惑の至りとなるかも知れない。月面を天一ぱいに張りつめると、丁度太陽の光りの明るさの八分の一ぐらゐと勘定であるが、その勘定どほり、月が近よつて來て、天一ぱいに光りふさがり、頭の重苦るしいこと限りがない。

いよ〳〵せつぱつまつて地球面と月面との距離が六千里ばかに迫つたとせよ今までは言はなかつたが、月にも地球にも互に引力の作用をもつてゐる。引力は近い所に强く、遠いところにかすかに作用するから、月の地球に近い表面に

は比較的いちじるしく、引つぱりよせ、これに反して遠い反對側には、さほどでもないから、その結果どうなるかを考へ見よ。一枚の紙を兩手できびしく引つ張つたら、たちまちべり〳〵と裂けてしまふだらう。月球でもそのとほりだ、同じ方向に一方が強く、反對の方がわづか引かれると、その食ひちがのため、月が細長くさせられ、さしも岩石の大塊、直徑八百八十里の大塊が、がら〳〵と崩壞し、大空一面に散亂して、全部とは言はないが、部分は地上に雨と降りそゝぐであらう。たゞかりめその火山の爆發さへも、溶岩の降下に生命財產を埋沒されることのしば〳〵あるに、今まのあたり、こんな大爆發が頭上に發起したら……、あゝそんな時代に生れあはせた我々の子孫こそ、まことに氣の毒のいたりである。

かう書いて來ると、何だかいやに人をおどかすやうで、小說らしい節がある

かのやうに人に誤解されるかも知れないが、これはそんな芝居氣あつてかいたのでなく、恐らく、しかあるべしとの學者の推測を傳へたので、小說におはらないだけ、餘計にわれ〳〵の胸を痛ましめる。こんなことが一篇の小說となつてしまへば、まことに結構で、ほつと胸なでおろされるが、どうやら一歩々々この二つの天體は好ましからぬ未來の出來事にむかつて、後戻りせず進行するらしい。

現に母體に接近して破裂した衛星の例を土星と、その環に見得るらしく、今や母體に接近して、破裂のうき目にあはうとする例を火星とその衛星に見つゝある。その委細は次章にのべてある。

右の一大事件のほか、實はどうやらそれまでに起りさうな、底ひも知れぬ悲劇の幕が全地上に展開されるだらう。

それは月の表面には大氣も漲はず、水も湛へられてないことで、しかのみならず、内部の熱は全然冷え切つて、今や月は冷たいむくろを、空間にかひなく曝らして居るにすぎないのである。水星としてもこれと等しい狀態にある。火星とても今や大氣を失はうとしてゐる。熱いものが冷めていくのは世の習ひで、熱力學の第二法則が天地を支配するかぎり、免れ得ない運命であらねばならぬ。その法則に曰く

熱は他から仕事をされずに、自分で低溫度から高溫度にうつることはできない。

この法則に絶え間なく支配されて、月はいまのやうにあへない最後の募を閉ぢ、とはにかへらぬ冷たいむくろとなつた。同じ運命は晩かれ、早かれ我が人類を初めとして一切の生物をはぐくんでくれてゐる、この地球をも亦襲ふであ

らう。盛者心衰、會者定離、どこにそんなことがあるだらうと、かつては上の空で聞き流してゐたのが、今ぞ知る、人の身の上にも、山河草木にも、地球にも、お日樣にも、この忌々しい言葉がひし〳〵と、おほひかぶさつて、一つとして例外を見せないことである。

それでこの道理をわが地球に當てはめたら、どんな結果になるだらう。いふまでもないことだが、總べて死ほどあはれなものはない。うちの飼犬が死んでも、何だか自分の魂の一部がえぐりとられるやうな苦しみを體驗することがある。況んや親とか同胞、さては知友等に死に別かれたときは、この世が暗闇となるやうに思はれるものだ。しかるに今つく〴〵考へようとする問題はそんな個々の物の死滅でなく、山川草木や禽獸や人間やを載せて、現在吾々のまのあたり見る世界全體の脈搏が止まらうとする最後の愁嘆場に思ひ耽けるのである。

熱力學の第二法則は相違なく、この樂土（又は見方によつては苦の娑婆）にも適用せられ、今こそ未だ、地球の胎内には、いくらかのこほぼりも殘つてゐるが、これが長い〳〵年月をふるにしたがひ、その熱をおもむろに空間に放射しつくし、いたましい寒冷が内部といはず、外側といはず、隙間なく詰めよせて、一切の植物も、動物も、そのため、ちゞこまつて、とてもその繁榮をたもつことが思ひもよらない。その間にも大氣が次第々々に地球を逃避し、現在のやうな豊富の狀態が、さういつまでも續くものとは思はれない。

今の地球の兩極地方を占領する寒帶が、否なそれより幾十百倍、冷酷な——それこそ文字どほり——寒帶が地球の全面に擴がり、はびこり、さすが智慧ある人類も年月とともに衣食の料に窮し、人口はいつのまにか、驚くべき減少をきたし、又この世の末ともなれば、人々の體格もいたく劣つてしまふだらう。

最後にのこつた一人

多くの知己や友人にも先立たれ、世界中でたゞ一人最後にのこつた人を想像せよ。この想像は空しきものではなく、晩かれ、早かれ到達すべき悲しい日のあることは最も理屈にかなつてゐることだ。最後の一人よ。からだは年來の苦しい衣食を求めるための足掻（あがき）により、みにくゝ衰へて、もういまでは食餌を求める勇氣もない。見渡すかぎりの山々には樹のしげり、夙くに枯れ去り、唯日光をしたうて、苔のたぐひのみ、地面低くゝにあへいでゐる。

空とぶとりも、いつしか絶えはて、雲の影さへ、どこへ行つたのかあまり見えず、吹く風さへも、弱々しく元氣のよいことこの上もない。まだ言はなかつたがもうこのこの頃は、太陽もよほど衰弱して、今の黄色な光りは著るしく赤味を加へて、これ又昔日の光明を放たず、その赤い日が澄みわたつた空に、う

らはかなげに、ぼんやり光つてゐる。

かゝる痛々しい有樣の中に、最後の人は、末期の水を飲ませてくれる看護人もなく、永遠の眠りにしづかについた。嗚呼これが、永い間、この地上をわが物顏に跋扈した人間種族のすべての最後かと思へば、かぎりない悲愴の念を催ほす。催ほすといつたところで、誰も催ほす者もない。みんな先きへ死んでしまつてゐるから。

その後、尙ほ地球上にはいくらかの下等動物が甲斐なき生を貧つてゐるだらう。がそれも次第に殲滅させられ、有ゆる流動物の跡をたち、丁度いま月を見るやうに一糸もつけない赤裸々の無味乾燥に陷るだらう。そして空しく太陽をめぐりて、それに率ゐられ、はてしらぬ空間に流轉の旅をつゞけて、どこまで行くのやら。

各惑星も亦こんな徑路をたどつて、同じく冷却する。何度もいふが、水星がすでに凝固した。火星もまさに、大氣や濕氣をすつかり失はうとしてゐる。この次ぎが地球の番だ。もうそろ〳〵その時期がせまつて來るだらうといへば、いやに脅かすやうだが、はかない人間の五十年の一生に比べたら、數十年、數百年は、まことに長い々々無聊な月日ともいへるが、幾千幾百億年の長壽をたもつ天體にくらべたら幾萬年、幾十萬年はむしろ蜉蝣のいのちに等しいものだらう。それくらゐの年數をたつと、いよ〳〵全地球の末期にいたる。大きい最後の苦しい息きを一つして、地球もこゝに大團圓となるであらう。

そんなら太陽はといふに、ひどく赤味をおびて、にぶくしか光らなくなつたが、その僅かな光輝も絶え間なく暗らくなり、いつとはなしに暗黑星の仲間となつてしまふだらう。盛者必衰の道理は、げに天地間の何物にも適用されて、

目こぼしは一つだつてありはしない。

・太陽の消滅　ほんとに考へても、何だかうそのやうだ。あの毎日大空にかゞやかに十方世界に遍照するお天道樣が、まつくらの炭團になつてしまふ。何だか言ふ者が、ちと、狂氣じめてゐるやうにも思はれるが、どうも何と思はれても消えるものは、消えるとしか言へない。すればお天道さまがなくなればどんなことになるか。それはわかり切つたことだ。晝がなくなり、夜ばかりとなり明けても暮れてもいひたいが、明けるときなき烏羽玉のやみが、なやましく果しもなく續く。いつ夜があけるだらうなどと問ふ勿れ。夜は長しへにあけないのだ。黑い太陽が黑いいくつかの惑星をともなつて、一秒間におよそ八里、いなもつと大きい速さで、ずん〳〵、ずん〳〵と側目もふらず、漂泊の旅をゐどけて行く。

はかなき人生　まづ大體、地球や太陽の將來の運命はこんな所へおちつくのだ。さやかな月にむかつて、ひとり思ひにふけると、自分はいつもかうした所まで考へ及び、そして人間の運命のいひやうもなき儚なさにつく〳〵世を味氣なく思ひ出す。

しかし又思ひかへすと、味氣なく思ふなどとは、甚だ勝手な、そして贅澤な考へかも知れない。人間が地上に生れ出て、苦しみあがくのは、あの空に雲のさすらひ行くがごとく、河に水の流れ走るが如く、唯地球の表面に臨時におこつた、つまらぬ現象の一つにすぎないのだと思ふ。であるから、たゞひもじい時に食を求め、冷たいときに焚火をこしらへ、戀しいときに女の肌にふれたら、それで人間としての任務はたりるはずだ。朝には紅顏あつて、夕には白骨となつて無常迅速とかこつとも、それが自然現象の推移の速度だから、どうとも仕方

がないではないか。ただ人間はあきらめと、悟りが肝腎だ。

苦しいことは早く去れかし、樂しいことは長くつづけかしと祈るが人情だがどうもさう自然にもとつた、人間の注文は、これに應じてくれ手がないので御氣の毒のいたりだ。生命は長かれ、地球は冷めたな、太陽も永久に輝けと、いくら泣いても喚めいても、それは徒事だ。日の入るのを戻れと招いたつて戻るものか。滅び行くべきさだめあるものを引き止めたればとて止まるものか。袖ふりはらつて、行くものは、しかと行き、かならず行く。

古來月にたいして、ただその清楚な光りを賞し、せい〳〵古を追慕したり、別れた友をなつかしんだりしたにすぎないが、知識の高く發達した近代文明人は、月に向つては唯いたづらにその明光を賞するに止まらず、すゝんで、その源をさぐり、ひいて、その行く末を熟慮したら、この宇宙の變遷、推移が恐

るべき大仕掛の仕組の下に、徐々として後戻りせぬ進行をつづけていくことを發見し、これまでの吾々の知り得た乏ぼしい天地間についての知識が根本的にくつがへるに驚くだらう。

なにゝ驚くかと言ふに、一日や一月や、さては一年の長さが加はり、地球の空に雲霧が消え、太陽の光明が全然消滅し、月がわれて碎けてしまふ。それは唯手近かな一例だが、しまひには現在見えるかぎりの、あの天上の美しい星みなが、炭團の仲間に沒落すると聞いたら、いかなる呑氣者もいさゝか胸を打たれるやうな感じを催ほすに相違ない。

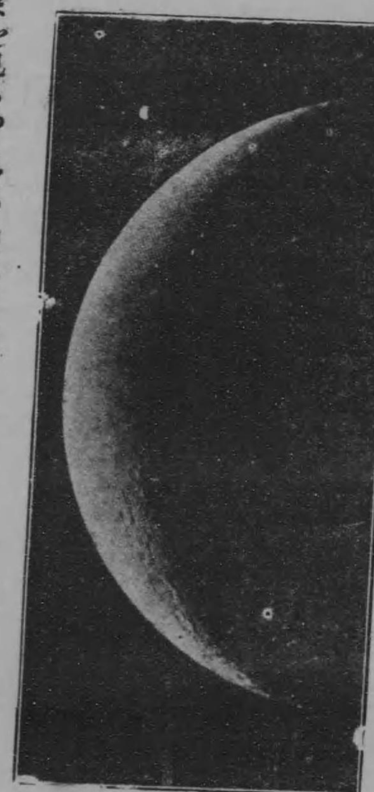
がしかし今はこの大宇宙の進展については多く語るまい。それはあまりこの本が長くなるからだ。

第七章　餘　談

金星の盈虛　以上各章であらまし月に關する一切のことを述べ終つたつもりであるが、なほ殘つた斷片的の記述をこゝに收めて、何かの役に立てようと思ふ。

天體のかず多きうちで、月ばかり盈虛の諸相をくりかへすと思つたら、それは大きなまちがひである。太陽のすぐのぐるりに廻る水星は、望遠鏡でみてゐると、太陽のあちら側に去つたときは、直徑が短かくなる代りに、全面がかゞやいて圓く見え、地球と太陽を結ぶ線が、水星と太陽とを結ぶ線に直角になるやうな位置に水星が來れば、半月形に見えて、月の上弦下弦と同じ形となる。そして地球に近づくほど、直徑が大きくなり、その代り光りの部分が漸く細く、

三日月形となり、やがて地球、太陽の間に入りこめば新月のごとく、暗らくなつてしまふ。その盈虛を次々に現はすことは全く月にひとしいが、唯その直徑の變るのが複雜である。しかしこの水星は小さいので、これを見るのはむづかしいが、金星になると餘程大きいから、ちよつとした望遠鏡を持ち合せると、



その半月狀や三日月などの有樣がきれいに鏡裡にうつることもあり、まるで可愛らしいお月さまを見るやうだ。圖は大正十二年一月十三日、月と金星との見掛け上接近した

どころを撮影したのであるが、知らぬ人は大きいお月さまに、小さいお月さまがついてゐると思ふだらう。即ち小さいお月さまが金星なのだ。この圖は寫眞であつて、唯兩天體を好いかげんにならべたものとはちがふ。

さるところで、夕方一群れの女學生に望遠鏡で代る〴〵、金星の見物をさせたと思ひ給へ。その中のひとりが、熱心にめがねに眼をあてつゝ

「かはいらしいお月樣！」

と思はず聲をたてた。この女學生、本當に月を見たつもりであつたのだ。

他の世界の月

惑星にも亦このやうに月のごとき、その形狀の變化をくりかへすものもあるが、又地球に月といふ衛星が從屬するやうに、惑星の中にも一つならず、二つも三つも又は多きは十個までも、衛星を所有してゐるものがある。つぎにそれらの衛星を一つ〳〵しらべて見よう。

太陽の近くの惑星から點檢する。水星と金星とは單獨の惑星で從者がなく、つぎの地球に一つの衛星があり、又そのつぎの火星には二つの衛星が、その火星の夜の空に月夜とてらすわけであるが、これは又頗る小さい月である。火星に近い方をフオボスと名づけ、その直徑は僅かに十五里にもみたないほどである。遠い方のもダイモスとよび、これは又思ひ切つて小さく、直徑四里ぐらゐかと觀測される。

二つとも形が小さいのみならず、その火星との距離が恐ろしく近く、フオボスは火星の中心から二千三百四十里しかなく、ダイモスは少しはなれてはゐるものゝ、それでも五千八百六十里に過ぎない。

又フオボスは火星の表面から計算すれば、その距離が一層ちかく、千四百七十里の近い空にせまつてゐる。そして七時間と三十九分で火星の空を西から東

に廻るが、火星の一自轉に要する時間は二十四時間と三十七分で、やはり西から東へと廻る。そこでフオボスは實際は勿論見かけ上も、西から東へとずんずん行くから、地球の月のやうに、西へいくものだとは誰も誤解しない。火星が一自轉する間に、フオボスはその火星を三廻轉もする。そして西天に上り、東天に沒するのである。

ダイモスは一日と六時間ばかりで、火星を一周し、その一廻轉は火星の一自轉時間よりおそいから、やはり月のやうに東に出て、西に沒するが大體その速さがひどしいので、つまり共に東へ廻り、ダイモスが火星の或る地方から見れば少しづゝ後ずさりするやうに見え、三日ばかりかゝつて、やつと東から出て西に沒する勘定となる。三日間も小さいお月樣がつゞけざまに照らしてくれるのだ。

こゝにちよつと面白い事件が起きかゝつてゐる。それはフオボスは今や次第に火星に近づきつゝあつて、もう少しのところで、さきに月のばあひに述べたごとく火星の引力のために崩壞しかけてゐることだ。一廻轉は一廻轉よりじり〳〵と引きつけられて、しまひには火星の低い空で、ばら〳〵にこはされてしまふかも知れない。月が地球の上空で粉碎されるだらうと云ふのも、あながち無稽の說でもないのである。

この二つの衛星はその形が至つて小さいので、發見のときに中々骨が折れた。今(大正十二年)から四十六年間、アメリカのワシントン天文臺のホールとよぶ天文學者が、その年火星が非常に地球に近よるので、もしや衛星がないかと、大きい望遠鏡をもつて數夜ひきつゞきに探したけれども、どうしても見付らなかつたので、もうあきらめようとした。ところがその夫人が男まさりの女丈夫

で、平生中々よく夫の事業をたすけたが、ホールの捜索をやめようとしたのを見て、今しばらく續けたまへと、無理强ひしたので、不承無承に又はじめ、遂に二つの衛星を發見したとの話である。

木星にも豐富に衛星がある。その數九個で、その中のガニメデは直徑千七百二十里もあり、惑星たる水星の直徑千二百里を凌駕してゐる。又その中の一つは、木星を廻るに三年も費やすのがある。ちよつとした望遠鏡があつて、それで木星さへ知つてゐれば、のぞくと必ずその中で比較的大きい四個ぐらゐが見える。そして毎晩つゞけて見ると、その位置がしだいに變るのが苦もなくわかつて面白い。

そのつぎの土星には十個もの衛星があり、その中のあるものは矢張り小形の望遠鏡で見るとよく見える。そのほかこの土星のすぐ側を光た環がとりまいて

ゐるのは何よりの奇觀である。そしてこの環は連續したものでなく、こまかい個體の群れ集まつて、皆いつしよに仲よく連れ立つて、土星をまはつてゐるのである。して見れば、ごく〳〵こまかい衛星の一團隊と見做しても一向さしつかへはない。

この環はもと、一つの衛星であつたのが、だん〳〵土星に近づいて、ついにその引力のため粉みぢん(こな)となり、そのかけらが今のやうな環を形成してゐるのだとも傳へられる。これも亦、わが月の最後を暗示してゐるかに了解される。

かうした天界を始終ながめてゐると、われ〳〵の地球や月の末路のあはれな手本がいくつも、まのあたり現はれて、いやな氣持ちになつて來る。そのいやな氣持を再び列擧するならば、

今や大氣が極端に缺乏してゐる火星は地球の終焉を見るやうなものだ。

常に半面だけしか太陽にむけず、且つ些の大氣も、もたない水星は地球の死後を物語つてゐる。

フォボスの將に火星に墜落しようとするのは、月と地球の最後の接觸と同じ有樣だ。

土星の環は、崩壞後の月の殘滓をまのあたり、見せつけられるやうなものだ。

それから、土星のつぎの天王星に四つ、海王星に一つだけの衛星がついてゐる。土星の衛星の一つフエーベと、天王星、海王星の全部の衛星はその主星を東から西に廻つてゐる。かういふことは太陽系內では、まことに破格の運動であるといはねばならぬ。

天球上に於ける月の徑路

月は天球（天を下から見上げると球面に見えるから、かく名けたのである）を西から、東へとうつり進み、二十七日三分の一で、天球を一まはりすることは第一章にのべたとほりであるが、その通路にあたる地名?をつぎにのべる。

天球面を若干の區域に分ち、その一つ〳〵を昔は、星宿、今は星座ととなへてゐる。日も月も、惑星も大體からいへば、殆んど皆同じ天の道路を通つてゐるが、その中太陽の通路が黃道、月のが白道といはれてゐるけれども、大した喰ひちがひはないのである。

その道筋を古來、支那や印度では二十八に區分し、これを二十八宿といつてゐて、廣く行はれたものだ。次に二十八宿をならべるが、括弧の內は本邦のよびならはしである。

角（すぼし）、亢（あみ）、氐（ひも）、房（そひ）、心（なかご）、尾（あしたれぼし）、箕（みぼし）、斗（ひきつぼし）、牛（いなみぼし）、女（うるきぼし）、虛（さみてぼし）、危（うみやめぼし）、室（はつゐぼし）、壁（やまとかきぼし）、奎（たいらぼし）、婁（たいらぼし）、胃（えきへぼし）、昴（すばるぼし）、畢（あめふりぼし）、觜（ちりこぼし）、參（からすきぼし）、井（ちゝりぼし）、鬼（たまをのぼし）、柳（ぬりごぼし）、星（ほさおりぼし）、張（ちりこぼし）、翼（たすきぼし）、軫（みつかけぼし）、

くだ〳〵しかつたが、辛抱して右のとほり二十八を一つもぬかさず書きならべた。

さてかう書きならべたところで、現代の天圖にはこんな名前でかいてないからわからない、それで右の星宿を現代慣用のものに引き直してみると、しつくり當てはまらないが、角、亢は乙女座に包容され、氐は天秤座、房、心、尾の三宿は蠍座のなかにある。續日本紀に養老七年十一月戊子の夜月房星を犯すと

あるは月がこの邊をうろついたのを見て記したのである。箕、斗は射手座、牛は水瓶座である。

かの赤壁の賦に、明月の詩を誦し、窈窕之章を歌ふ。月は東山の上に出で、斗牛の間を徘徊すとあるが、斗と牛は正に月が射手座から水瓶座にうつつたのだ。それに此處に笑止の至りは、世の漢學者たち、天文を知らないので――それは無理もないが――斗牛の二字に面喰ひ、何ととりちがへたか、斗は北斗なり。牛と牽牛なりと解釋し去つて平然たるものである。北斗は北斗七星とて、北極星をさす七つの星、牽牛はこれも二十八宿に距たつた鷲座にある明星で、かの七夕の傳説にある牽牛、織女の前者である。月がこんな所へ行くものか。もし行つたら稀代の出來事として、天文學者がどんなに吃驚するかわからない。ところが有りふれた漢和字典の斗牛の解説を見たら、殆んどこの誤りを免れて

ゐない。ためしに讀者は座右の辭典をしらべて見給へ。

つぎに女、虚は水瓶座、危、室壁は、ペガスス座にあたる。婁、胃は牡羊座にふくまれる。徒然草に八月十五日、九月十三日は婁宿なり。この宿清明なるゆゑに、月をもてあそぶに良夜とす。とあるが、別にその宿が清明であるとも思へない。昴、畢は牡牛座である。昴は又六連星ともとなへられ、かの三つ星とて子供でも知る星のちかくにある一握の銀砂のごとく、寄りつどうた星の一群である。三代實錄に貞觀十六年十二月十一日乙丑、この夜月昴星を犯かすとあるは、月がこゝへ來たことを云ふのである。

參、觜はオリオン座で、參はその名も高い三つ星のことである。井は雙子座鬼は蟹座、柳、星、張、翼の四宿は海蛇座に包容せられ、軫は鳩座となり、それから又元へもどつて角、亢と來る。月はすべてこれらの星座を順行してあま

り外へそれるものではない。月の徑路を知らうと思へば、どうしても天圖を一枚、座右に備へねば駄目なことは、地理をしらべるに地圖の入用なこと〳〵同じ程度である。

月と舊曆　舊曆は又太陰曆、略して唯陰曆ともいつてゐる。そのみなもとはとほく古代に起つて、四千六七百年もの大昔である。このころは一般民衆が、注意粗雜であつて、もろ〳〵の天象をふかく氣にとめるやうなことはなかつたらしい。しかしその中でも月の盈虚だけは、いかに無心な未明民族にも止まつたと見え、それが二十九日半を週期としてくり返されることを知つた。

それが一個月の起源であるが、半ぱな日數があると具合がわるいので一個月を二十九日と、三十日との二種と定め、交互に循環するやうにした。そして一個月が十二たび、くり返へされると、略一個年となると思つた。十二個月の一

個年は日數にかぞへなほすと、三百五十四日となり、實際の一個年の日數三百六十五日四分の一より少ないので、この十二個月の一年は、次第々々にその日附が季節より進むことになる。それでその殘りが段々たまつて丁度一個月となれば、こゝに閏月といふものを置き、その年は十三個月あることにした。こんな風に出來たのが、太陰暦で、日本では欽明天皇のころに支那から傳來して、今日でも尙僻地ではこれを固守してゐるところがある。

陰暦の日附は月の朔すなはち新月を一日として起算してあるから、まことに月の盈虛にはよく合致して、陰暦十五夜といへばすぐ、あゝ明るい月夜かと想像がつき、太陽暦即ち新暦のある月の十五日の夜といつたところで月がどんなに照らすのか、わからないと大分越きがちがふ。この點だけはたしかに陰暦はよくわかり、又潮汐の滿干は月の作用によるから、この點も陰暦の使用が便利

であるが、一年の季節は元來少しも月の影響がなく、吾々の日附を知りたいのも、主としてその季節を表示されてゐるからであるから、陽暦は精密に季節に一致し、陰暦があまりよく一致しないので、とう〳〵現今は陰暦の方は廢されてしまつた。

ところが古からあり來たりの年中行事の中、多年の習慣上、陽暦で執りおこなつては、はなはだ、その際の氣分がそぐはないものがある。三月三日桃の節句と云へば、あまり陰暦の日附が季節にあはないにしても、大抵桃の花がひらくが、陽暦の三月三日、まだ梅の花も咲かない寒いころに、お雛さまをならべて桃の節句といつて見たところで、少しも昔のやうな氣分になるものでない。されば宜て一個月おくらせて、四月三日を桃の節句とすればよいが、元來が三月三日と、かう口調附けられてゐるので、四月三日ではちと口調がおもしろく

ない。五月五日の端午の節句でも、又七月七日の七夕でも、九月九日の菊の節句でも同じやうに不便をかもすに至る。況んや八月十五夜、九月十三夜の月見を、その日附のまゝ陽暦に準用したとて、決して決して月が注文通り出てくれないから、少しも月見の宴とはならないのである。かく考へて來ると、陰暦の廢止は、やがてこの民俗的にも、又文學的にも、捨てがたい趣きを有する年中行事の或るものが自然消滅とならざるを得ない破目となる。

實際においては無論陽暦がすぐれてゐる。けれども世の中はさう、實利や理屈一點ばかりでやつて行けるものではない。吾々はこの不便な陰暦にも、ある一種の淡い愛惜の念をしみじみ感せざるを得ないのである。

兼好法師の月夜觀

話は大分とび〳〵となるが、こゝに徒然草にあらはれた兼好法師の月夜觀を批評しよう。兼好いはく

花は盛に月は隈なきをのみ見るものかは。雨にむかひて月を戀ひ、たれこめて春のゆくへ知らぬも、なほあはれに情ふかし。咲きぬべきほどの梢、散りしほれる庭などこそ見どころおほけれ。歌のことばがきにも、花見にまかりけるに、はやく散り過ぎにければとも、さはる事ありてまからでなども書けるは、花を見てといへるに劣れることかは。花のちり月の傾くを慕ふならひはさることなれど、ことにかたくなゝる人ぞ、この枝かの朶散りにけり。今は見所なしなどはいふめる。萬の事もはじめをはりこそをかしけれ。男女の情も、偏にあひ見るをばいふものかは。逢はでやみにしうきを思ひ、あだなるちぎりをかこち、永き夜をひとりあかし、遠き雲ゐをおもひやり、淺茅が宿にむかしを忍ぶこそ色このむとはいはぬ。望月の隈なきを、千里の外までながめたるよりも、曉近くなりて待ちいでたるが、いとふかう青みたるや

うにて、ふかき山の杉の梢に見えたる木の間のかげ、うちしぐれたるむらくもがくれのほど、またなくあはれなり。椎柴白樫などのぬれたるやうなる、葉の上にきらめきたるこそ、身にしみて心あらん友もがなと、都こひしうおぼゆれ。すべて月花をさのみ目にて見るものかは。春は家を立ちさらでも、月の夜の閨のうちながらも思へるこそ、いとたのもしうおかしけれ。

この意味をつゞめるとかうだ。晴れたお月夜ばかりが趣きのあるものでない、風流の心得だにあらば、雨夜の戸外にほのあかるい月光でも亦、すてがたい風情がないともいはれない。櫻の花とても、滿開時よりか、むしろ、これから咲かうとする蕾、又は散りすぎて、庭の苔に落花の雪のつもるのがかへつて見るべき價値がある。すべて萬事が、事件の中心よりも、ちよつとそのあとさきにずれてゐるときが面白いものだ。たとへば男と女との間でもだ。首尾よく逢う

て交歡した夜の思ひ出よりも、女が生理上の苦痛か何かで逢へなかつたうき思ひ、さては忌避されたとき、故障が起きて行かれなかつたもどかしさ、昔しのえにし薄かつた戀の幻影などをしたつて、思ひ出のかなしさに泣くのが、面白いものである。

お月夜にした所が、月明千里と云つた調子よりかも、待ちくたびれた頃、曉のまへにとぼけてさしのぼる、有明月が、山の杉の枝に隱見するありさま、しぐれの晴れ間、晴れ間に、束の間のおの〳〵きを見せるありさま、潤葉樹の艶ある葉に濡れたありさま、さうした風情の方がかへつてよいと云ふのだ。

果してさうだらうか。唯何氣なく兼好の感想記を讀んでいくと、すぐそれに共鳴しさうになるが、もつと深くその論據の土臺をほじくつて見なければ安心ができない。蕾も、あすあたりは綻びて、花粉と匂ひが風のまにまに漂ふだら

うと思ふ、その刹那の豫期觀念が、力づよく見物人の好き心を唆るのである。

落花繽紛、あゝきのふあたりは、さぞや見事であつたらうとおもふ、その時の間の追慕の情が、又なく吾々の情緒をゆらめかすのである。

盛時ならぬときに盛時を思ふ。さすれば實況に加はるに精神の美化作用が加はつて、いよ〳〵花ざかりの景觀は心の中に誇張されてうつるに至る。

女と會はなかつた夜の甘い愁嘆にしたところが、又の機緣のそのたのしさを倍加して心裡に忍がくからこそ、かへつて會はなかつた夜をめで、たゝへるのである。しかしもし相手の女性が絶對的の不具者とでもわかつたら、さすがの灼熱された愛情も、水を打たれた熾火のごとく、唯束の間に消盡するだらう。會つて遂げ得るポシビリチーがあればこそ、あはぬ夜の煩悶も甲斐があるといふものだ。千里をてらす月よりも、弦月や、しぐれ月がよいといふのは、いつ

かは望月になる、いつかは晴れた夜にてらすなどゝいふ期待が交ればこそ、こんな半ばな月かげをしたしむのではなからうか。月は弦月以上に太らない、月は時雨の夜でないとてらさないとしたら、さまでも美しい夜の景色はあらはれず、比較的うすぐらいつまらぬ月夜しか見えず、さうして月夜はこんなものかなあと考へがきまれば、誰も大して相手にしなくなるだらう。晴れた滿月も又ないことはないと思ふからこそ、うすぐらい月に辛抱ができ、且つめでる心も起こるのだらう。

兼好がかういつたとて、すぐそれに同感して、肝腎の基礎を閑却しないやうにしたいものだ。

高山樗牛の月夜觀　近世の天才高山樗牛の月夜感を冷やかに檢査する。この月夜の美觀の趣旨はかうだ。

先づ月夜の美觀をつくる要素として三項を擧げた。一は月の光である。二はこの月の光にてらされた夜の世界である。三はこの月夜の光景が觀者の心にひきおこす所の聯想である。

一の月の光から言ふならば、それを色彩にたとへるならば青といつても普通の青でなく、少しく暗らさと淡さとの加はつたものである。元來青といふものは人心を興奮せしめるものでなくして、むしろそれを鎭める力がある。即ち青の色に對するときは、沈靜、安慰、幽邃とでも名づくべき精神作用がおこつて來る。

そこで月光の青はいかにといふに、普通の青に一味の暗らさを伴なふ。つまり青が黑に近づいたことになり、かゝる色彩は普通の青よりも、一層心を神秘の境に沈潛せしめるはたらきをなす。又一面に青が濃厚でなく、その淡

々しきことは物事の非實在をあらはすもので、何となく月夜に佇めば、事物の實在が不確かになるやうに感ずるも亦この故であらう。

二はそれが夜の世界であることが、一層心を沈靜に歸せしめるといふのである。但しいまいふ夜とは人生の活動時に對たる休息時の謂である。この四邊闃として沈まりかへつてゐる時の月光なればこそ、そこに深い趣きも生じて來るが、もしいくら暗い夜にしても、日中のごとき喧騷がつゞいたならばしかく幽妙なるを得るだらうか。

人はなべて日中に於いては意慾、煩悶に追はれ、顧みて靜思するの暇がないであらう。夕陽地下に沈み、人生の戰場、ひとまづ終熄するにあたり、はじめて魂の靜穩おこり、しづかに月夜を觀照するに、ふさはしい狀態となるであらう。月の光りと夜の靜寂とを相俟つて、いよ〳〵人の心をして、幽邃

の神境に誘入するにいたる。

三は月光下においてしづかに心の底からにじみ出す聯想そのものである。月をみておこす感情はその内容は沈思とか悲哀とかいふものだが、その形式においては不定であつて、何等たしかな對境があるわけではない。たゞ何とはなしに思ひに沈み、かつうら悲しくなるのである。しかしそれが段々かたちを具へて聯想となつて現はれて來る。その聯想は個人の性格や經歴によつて一樣ではないが、過去の追想とか、遠人の懷慕とかとなつて、そゞろに迫まり來る感慨のかなしさに堪へざらしめるに至る。

地上の風物は時と所との變るにしたがひ、又さまざまに姿をかへるけれども、天上に冴える一痕の月かげは時と場所とに應じ、その形のかはることはない（著者いふ。天文學的に永き時刻を考慮すれば、むろん變化はあるが、

數千數萬年ぐらゐでは殆んど感じ得べき推移はない）それゆゑ、一層、かうした感慨を催さしめるに至るのである。

以上が月夜の美觀を構成する要旨となるべきものであるが、なほこのほかにこの夜の空に漂ふ空氣の冷たく爽やかなこと、又月を見て樂まうとするその心掛け等が美觀を大にたすける作用をなすだらうが、右記の三要素は凡べての人に共通なものであると思はれる。

以上樗牛の所論の大要を摘んだつもりだが、ほんとにあの青白い光りは、よく心を落ちつかせる効能のあるものだ。街頭高くてらすアーク燈でも、隨分きれいだが、それと月光とを對比すると、月光の方が餘計に青く清楚なことを感ずるであらう。又夜の世界の靜寂を說き、遠い昔、遠い異境を聯想するのやるせなさを言ふあたり、同感に堪へない。しかし吾人には又吾人獨特の月夜觀が